



見学店「ルナテイク学園」

- ・ 30分1回コース 4000円
- ・ 40分1回コース 4000円（今だけ30分コースと料金同じ！）
- ・ 60分2回コース 7000円
- ・ 90分3回コース 11000円
- ・ 指名料 2000円
- ・ 延長10分 1000円
- ・ 指名追加1回 3000円
- ・ オプション 部屋のポスターをごらんください。

・当店は見学店です。マジックミラー越しにキャストの日常を覗き見て、楽しんでもらうお店です。性風俗店とは異なるので、あらかじめご理解ください

・1回10分、お気に入りのキャストを呼ぶことが出来ます。人気キャストは指名が重なることが多いため、タイミングによっては最後まで空きがない場合がございます。早めの指名をおすすめしますが、回数を使いきれなかった場合でも返金はしておりません。あらかじめご了承ください。

・キャストへのメッセージには、備え付けのホワイトボードをお使いください

・キャストへの応援として、1枚1000円でコインを販売しております。マジックミラー下部の穴から渡すことが出来ます。詳しくはフロントまでおたずねください。

・毎月5の付く日はコスプレデー！

・キャストへの直接交渉、本番要求、他のお客様のご迷惑になる行為、また、当店にそぐわない行為と判断したときは、ご利用のお断りの上、退店・罰金を請求する場合がございます。

・繰り返しますが、当店は見学店です。性交渉の相手を求める場合。また、女性とのコミュニケーションを欲する場合は系列店をご利用ください。当店はキャストの日常をこっそり眺めて、楽しんでもらうことをコンセプトにしております。彼女たちへの直接的な干渉はご遠慮ください

※当店のキャストは全員が一八歳以上です。

名前「ゆうちゃん」

年齢「18歳」

身長「159センチ」

スリーサイズ「100・60・94」

血液型「A」

星座「山羊座」

趣味「園芸」「ネットゲーム」

性感帯「胸……ですかね」

得意なサービス「胸を使ったことです！」

好きな男性のタイプ「王子様のような人」

女の子からの一言「指名されたとき、喜んでもらえるように精一杯頑張ります！……ですが、まだ、あまり得意ではないことが多いので、お客様に教えてもらえると嬉しいです……♡」

店長より

日本中の巨乳大好き、おっぱい星人のみなさん。お待たせしました！

一メートル越えのバストを誇る極上の美女のゆうちゃんです！

断言しますが、ソープやデリヘルには絶対にいない極上のボディ！

街を歩けばグラドルやAVのスカウトに声をかけられることが多々ある彼女は、ちょっと引つ込み

思案！

なんと……

男性経験0！

どころか、彼氏すらいたことがないとか……

わかります！お客様の言いたいことはわかります！『流石に盛りすぎだろ』と言うのは正論です！でも！事実なんだから仕方がない！男好きする身体のスーパ―爆乳美少女が処女なのは事実なんだから！嘘を吐けって言うんですか！？この店長に！？

ゆうちゃん、実はお金に困ってこの業界に……ですが風俗は嫌だと言うので当店にやってきました！冷静に考えてください！風俗では絶対に出会えない極上のデカ乳美女！今指名しなければ！世界中の爆乳女と戦っても遜色ないデカ乳を網膜に焼き付けなければ！

いついなくなってもおかしくないんですよ！！指名するなら今！！！！

一つ欠点があるとすれば、それは「男性経験がなさすぎる」ということ……

お客様を喜ばせるテクニクはまだまだ未熟！ですが！それを補ってあまりあるドスケベボディ！

お客様が一から好みを教え込むというプレイがおすすめです！

店長のおすすめはやはり「疑似パイズリ」です！おひねりコインは多少嵩みますが……この乳を前にして、パイズリを見なきや嘘です！当店ナンバースリー人気のおうちちゃん（18）！いついなくなるか、店長ですらわからない（冷や汗）ので、指名はお早めに！！

名前「めぐちゃん」

年齢「18歳」

身長「169センチ」

スリーサイズ「88・58・90」

血液型「B型」

星座「乙女座」

趣味「スポーツ観戦」「フットサル」

性感帯「……うなじ、かな？」

女の子からの一言「指名されても期待に応えられるとは思ってないから、指名するなよ変態野郎ども。媚びるのも苦手だから、貢ぐつもりのあるマゾだけ指名してこい。気に入らなかつたらこっちら断るからな」

店長より

金髪ショートめぐるちゃんは、一見するとこわい不良ちゃん！

でもでも、内心は実はすごく優しい子！

素直じゃないツンデレちゃんなので、一言コメントはこんなのですが……実際に指名されたら（チヨロインなので）（これ言うて殴られちゃうかも）お客様のご期待にはだいたい応えちゃう、素直で心優しい女の子です！

めぐるちゃんの売りはなんといっても、お客様とのコミュニケーション！！

見学店経験者のお客様が、外れを引いて思う定番の――

「もっとコミュニケーションとれよ……」

「もっとサービスしろよ……」

「顔がいいからって手抜きしてんじゃねえよ……」

……断言します！めぐるちゃんにはそれは絶対にありません！

お客様を満足させることを第一に考えた、実はかなりの真面目ちゃん！

店長の私との面接のときに「お客さんにお金をもらった分は、絶対に楽しませるつもりです」と真

面目なことを言っていました！（笑）

めぐるちゃんはちょっとサドっ気の強い女の子！

可愛くておっぱいの大きい、一見ヤンキー風の女の子から「変態野郎♥」と罵りたい方には是非おすすめ！「いじめ」ではなく「いぢめ」でお客様を天国に連れて行ってくれること間違いなし！

じゃあ「いぢめたい男の子」には不向き？ノンノン！（古いかっ（笑））真面目なめぐちゃんはお客様の意向には逆らいません！常連さん曰く「変態野郎って罵ってくるヤンキー娘が、パンツ丸出しにしてるのやばすぎる……っ！」とのこと！

当店人気ナンバーツ一の看板は伊達じゃありません！

めぐちゃんのおすすめプレイは、ずばり「おしゃべり」です！基本オプシオンなので、当店の利益は薄いですが（とほほ……泣）満足していただけること間違いなし！生意気な女の子にいぢめられた方も、いぢめたい方も、初心者から上級者まで間違いなくおすすめできる女の子です！

名前「さなちゃん」

年齢「18歳」

身長「151センチ」

スリーサイズ「71ー53ー80」

血液型「AB型」

星座「蟹座」

趣味「美術館」「映画鑑賞」「読書」

性感帯「愛しい殿方に触れられるのならば、全身が性感帯にございます」

女の子からの一言「さなは未だ未熟な身……お客様の真の満足を引き出すことが出来るかはわかりません。ですが……さなを指名していただいた方に喜んでいただけるように……多種多様な甘言密語を学習中です。お客様の欣喜雀躍を引き出せるように……そして……さなで満足いただけるように、日々、精進して参ります」

店長より

さなちゃんは当店の推しも推されぬナンバーワン！

身長もおっぱいも小さく、一見すると引きが弱く感じられますが――

とにかく、一度指名していただければわかります！

さなちゃんの圧倒的なサービス精神！お客様を喜ばせることに特化した内容！

とにかく！

とにかく！

当店が初めてのお客様も！

見学店が初めてのお客様も！

騙されたと思つてさなちゃんを一回指名して見てください！

見学店がどういふものか、というのが、この娘に全て詰まっています！

言葉が足りなくて申し訳ございません！リピーター数一位！年間指名数一位！オプション獲得数一

位！当店のありとあらゆる一位を独占中の少女です！それが全てです！

さなちゃんの売りはなんとといっても、その才能！

男の子を喜ばせることに特化した言葉遣いと挑発に、小さな胸には不釣り合いの大きなお尻！

彼女は小さな子供ではなく、ただ、「胸だけ小さい」立派な大人であることがわかります！和服が

似合いそうな大和撫子が、お客様をよろこばせるためにあらゆる姿を見せる……

断言しますが、彼女クラスの女の子は他の見学店にも絶対にいません！！

当店のような弱小店が営業していけるのも彼女のおかげです！さなちゃんには毎日頭が上がりません！(笑)

そんなさなちゃんのおすすめプレイはやはり「生脱ぎ下着プレゼント」です！

さなちゃんの熱いこだわりで「その日に、ちゃんと履いていたものじゃないとお客様を騙しているみたいで嫌だ」ということで、一日一回だけの超特別サービス！その分コインは弾みますが——断言をします！さなちゃんを指名したお客様は絶対にパンティが欲しくてたまらなくなります！ 既に品切れでも怒らないでください！さなちゃんのおっきなお尻は一つだけなんです(笑)

当店ナンバーワン人気のさなちゃん！どうすればいいかわからない方も、まずはさなちゃんを指名してください！見学店と、当店の楽しみ方が全部詰まっています！

1・人気ナンバーワン「さな」の指名

客が使ったオナティッシュの臭いは、どれだけ処理をしても慣れるものではない。

畳二畳ほどの狭い個室。ネットカフェの部屋を連想させるそこで、一人の成人男性が、センズリをこいていたのだ。噓せ返るような精臭は、二枚重ねのマスクを貫通してくる。あなたは部屋をアルコールで拭き、消臭スプレーをこれでもかというほどに浴びせて――

それから、部屋を出た。

事務所に戻って腰掛けると、監視カメラは大部屋を移している。

学校の教室を模した大部屋。前にこのテナントに入っていたのが、高校をテーマにしたイメクラであり――それが「教室」だけを置き去りにして夜逃げしていった。これ幸いとばかりに、あなたが居抜きで使っていたのだが――

わざわざ「JK」を題材にしたというのに――大部屋が広すぎるが故に、個室の数が限られて、客の回転が悪いというのが最大の失策。

――見学店「ルナティーク学園」は、常に満員の稼働でようやく黒字、といった塩梅。

全力で漕ぎ続けなければ転ぶのは、自転車操業どころか一輪車操業。あなたは安物のパイプ椅子に腰掛ける。ぎしっ、と鳴る不快な音。店長が一日十二時間使う椅子であっても、買いかえる予算すらないのが現状。

——見学店のオーナーを引き受けたのは、完全なる不可抗力。

当時——

あなたは交際していた恋人に裏切られて、一千万円近い借金を背負わされた。

消費者金融や銀行からの借金ならば、自己破産でも考えたが——彼女は闇金から金を借りていたらしい。あなたの筆跡を偽造して、勝手に判子を盗まれて、捺印された、法的には絶対的に無効な契約書も——アンダーグラウンドの世界の人間には、有効であると判断されたい。だが、普通の大学生だったあなたに、一千万円を払うには、内蔵を売ってもまだ足りない金額で——

「あなた、経営学部 of 学生さんなんだってな。そんなら、うちの店を黒字にして借金返してみいや」パンチパーマで白スーツ——今時のVシネマでも見えないような、コテコテの関西弁やくざに言われた台詞は、今でも、耳にこびりついている。

経営学部はそういうものではないし、この借金は自分には払う義務はないし——そもそも、普通に就職をして十年二十年かけて返す——という理屈が通用する世界ではないらしい。大学を休学にさせてもらえたのは、彼らなりの優しさであるのか。

だからあなたは、今、監視カメラで店内を見回している。

自分の倍は年上の男性店員が、自分と同じような年齢の大学生の客を相手にシステムを説明している姿——見てられないなと思いつながら、仕方がなく、トラブルが起きないように大部屋の画面を眺める。

——そこには、六人ほどの制服姿の少女達がいる。

「そんでね、ようやくナンパされてとうとう私にも春が——って思ってたなら、そいつただのキャッチだったの！信じられる！？」

「ないわー！彼氏に振られた女なんか一番チョロいのにな」

「……あの、キャッチとはなんでしようか？」

「うっそ、さなちー知らないの？」

「さなちー、街歩いてたらアイドルのスカウトだとか言われて声かけられない？あれ、嘘だかね？……いや、さなちーくらい可愛いならガチなのもあるか……」

「……あれは、嘘だったのですか……シヨックです……」

彼女たちは当然——現役の女子高生ではない。

一八歳未満の少女を雇えないのは当然の事柄だが、客も無粋ではない。彼らも「そういう設定だ」と理解をしながら、目の前の女が女子高生だと思いきんで、自分を慰めているのだ。互いに辛い身だなど——個室内にこっそり設置されたCCDカメラを眺める。中年姿のサラリーマン。九〇分三回コース一〇〇〇円が入っている彼なら——万円を返済するには、果たして、何年がかかるのか。額面だけでも九万分——店に入ってくる利益は——その上で家賃や人件費を考えると——何日か、何年か。暗算できないので、考えるのをやめた。

そうこうしている内に、彼——中年リーマンは指名を決めたのだろう。

入店時に渡されたタブレットを操作して——

「……四番席様、『さなちゃん』に指名です」

あなたは、マイクを通して大部屋に語りかける。

「……んっ」

先ほど、彼女たちから「さなちー」と呼ばれた少女は――

天井に取り付けられたスピーカーを見つめる。

ふわふわにウェーブがかかった黒髪で、全体的に線は細い。どこか眠たそうな瞳を浮かべながらも、物静かで、ただ、そこにいるだけでも品を感じさせる。

絶世の美少女と呼ばれる類の彼女は、「キャッチ」や「彼氏に振られた女」のような――凡俗な世界とは一切、縁がなさそうな雰囲気。箱入り娘という言葉を体言しているようだ。世の中の汚いものから遠ざけられて、世間を知らないお姫様ではなく――鳥かごの中に閉じこめられて、世界を知らないような少女。線が細い彼女が着物を着用すれば、きっと、途方もなく似合うのだろうなと――誰しもが思うことだろう。

そんな絶世の美少女の、どこか――

アンニュイな表情に、思わず、心がずきつと痛む。

「おっ、さなちーご指名だよ？」

「いいなく、人気ナンバーワン……今日何回目よ」

「それでは……行って、参ります……」

さなは、彼女たちに深々とお辞儀をしてから――マジックミラーの前に立つ。大部屋の側からは、鏡の向こう側を眺めることは出来ない。

わざわざ——女の制服姿を見るために、決して、安くはない金額を支払う成人男性。さなは、まだ幼い少女だが——それでも、意味を理解できないほどに子供ではない。

「……お客様、さなを指名していただき……ありがとうございます、ございます……♡」

再度——深々と、お辞儀をするさな。

性風俗店にいる女は、下品で、野卑で、知能指数が通常の人間に比べて遥かに劣る——と、中年リーマンは今までの風俗経験から知っているのだろう。

それが——

今、目の前にいる少女はどこまでも「凜」とした「品」を漂わせている。

名家のお嬢様が没落して、ここまで身を落としてしまった、大正浪漫を感じさせるようなもの。中年リーマンは、その動きが見えないと知っているながら——つい数秒前までシコる気満々で座椅子に深々と腰掛けていたのに——今は正座に座り直して、お辞儀を返している。

——安土早苗は、名家の少女。

「早苗」から二文字を取って「さな」という源氏名。「身体がエロいというのは絶対的なアドバンテージ」という性風俗の店において、彼女はとても貧相な身体つき。衣装の発注の際に必要なので、測定したときには——バストサイズは七一センチのAAカップ。一五一センチの小さな少女の貧相な胸は、まさに「少女」という言葉に相応しいが——

それでも、さなは、どこか大人の魅力を漂わせている。

幼少から乳母に花嫁修業を叩き込まれて、着物の着付けまで出来るような少女。およそ、「見学

店」というものには相応しくなく、今すぐ社会に出たとしても自立できそうな優れた精神と能力を持つているので——

だから、中年リーマンは自分の三分の一も生きていない——

本来ならば、絶対に、雇ってはいけない現役高校一年生の、彼の子供のような年齢の少女に——
反射的にお辞儀を返したのだろう。

「さなは、その……こういつた行為は、未だに不慣れた未熟者ですが……精一杯、喜んでいただけるようにご奉仕いたします……なにとぞ……ご指導、ご鞭撻のほどいただければ……♡気になったことがあれば……そのホワイトボードで、さなに、なんでもお伝えくださいませ……♡」

さなはまっすぐと、マジックミラー越しに男を見つめる。

彼女からは鏡に反射した自身しか見えないはずなのに——

そこにいる男へと、まっすぐな敬意を払って言葉を向けるのだ。

それから、さなは、足下のタイマーを押して——〇分間の計測を開始する。

「それでは……さなに、どのような格好をご所望でしょうか？」

『お尻を突き出して、ふりふりして』

「ふむっ……お尻を、ですか……♡それはよかったです……さな、乳房の方はあまり自信がないのですが……お尻は大きくて、安産型で、沢山の子供を産めそうだと多くの殿方に褒めていただけるのです……♡」

学校では校則に従って、しっかりと長い丈のスカートで、制服をびちっと着こなしているのに——

今は太腿を激しく露出して、胸のボタンも二つ開けた不真面目なギャルの格好のさなが——
「んっ……♡これで、よろしいでしょうか？」

マジックミラーへと、臀部を突き出しているのだ。

バストが七一センチでも、それはさなの乳房が極端に小さいというだけ。彼女の発育自体は良好であり——

だから、ヒップのサイズは八〇センチもある。

例えばそれがグラビアアイドルならば、売りになるどころか「ちよつと小さいね」と言われるものだ——さなの線は、強く抱きしめれば折れてしまいそうなほどに細いのだ。そんな少女の八〇センチヒップは、グラビアアイドルの贅肉で肥え太った一メートルよりも遥かに大きく感じられて——実際、スカートを押し上げるような張りのある臀部に、中年リーマンは夢中になっている。

さなはそのまま、臀部を、マジックミラーへと押しつける。

あなたも経験したことがあるが——あれは麻薬のようなもの。

さなの臀部がマジックミラー越しにべたんと押しつけられて、肉が接地した部分だけが暗くなる姿。さなは優しい笑みのまま、両手でダブルピースを作って、首だけで男を振り返る。ノリノリのギャルがやれば、さほど、性的に響かないだろうが——

さなのように大人しく清楚な少女がやると——そのギャップはあまりにも強く、激しいものになる。さなはそのまま——

「ふりふりっ……♡ふりふりっ……♡さなのお尻は……どうですか……お客様……♡」

小さな声で、臀部を左右に振りながら男に尋ねる。

人気ナンバーワンのさなは、お茶を挽くことが滅多にないが——たまに、待ち時間が長引くタイミングがある。今日も、一時的に指名が連続したが、中年リーマンが呼ぶまでは少しの間があつたので——だから、さなの常連客曰く「当たり」の時間であり——

「あつ……申し訳ございません、お見苦しいものを……♡」

椅子に座り続けて、蒸れて、熱に火照つたさなの臀部は——
マジックミラーに、汗ばんだ結露を浮かび上がらせる。

中年リーマンは——電灯に吸い寄せられる羽虫のように、腕を伸ばしてその熱に触れようとする。マジックミラーの表と裏。彼がさなの蒸れたデカ尻の熱に触れられることはないのだが——そうして、鏡越しに指に触れるだけで満足なのだろう。彼はさなの尻が触れていた部分を反対側から、指でこすつて——ちゅぱちゅぱと、自身の指を舐めしゃぶる。個室が監視されていない、という油断によるものだが——見ている分には不愉快で仕方がない。男として、彼の感情はわかつて——「安土早苗」という少女はまだ幼気な女子高生。あなたにとつても大切な少女で——そんな彼女を、見学店で働かせているに人間に言える道理もないのだが——

男は、ちゅぱちゅぱと指に唾液をまぶしてから——

一枚千円のおひねりコインを三枚——マジックミラーの下部から、さなに渡す。

中年リーマンの、乾いた後には激しい悪臭を放つであろう唾液にまみれたコイン。それが千円札と同義であつても——娼婦でなく、女子高生であれば、ハンカチ越しに摘むのも躊躇われるもので——

だから――

「おひねりを、ありがとうございます……」

さなは女子高生ではなく、娼婦だということだ。

「さなは、感謝の念に絶えません……お礼、と言うには、あまりに粗末であるかもしれませんが……さなの下着を……もし、よろしければ……お見せ致しましょうか？」

さなは、コインを握った手のひらを――胸元にぎゅつと寄せて、眼を瞑り――

日曜日にならず教会へと通う敬虔な教徒のように、感謝の念を告げる。

さなは和服人形のような雰囲気であるから、教会とは正反対であるはずなのに――

神様は宗教によって異なるが、「神聖」という概念は世界中で共通するのだとあなたは考える。新興宗教の家に生まれていれば、誰しものがあがめ奉ることに違和感を抱かない少女のカリスマ性――それが見学店で、男の精液を搾り取るために使われるのは、世界全体の損失だが――それをさなが望んでいるのだから、ただ、彼女を拝み、彼女に生かされている、一信者のあなたには何も言う権利はない。

中年リーマンが激しく、首が千切ればかりに縦に頷いているのが、見えるはずもないのに――マジックミラーの向こうの男性が、醜態を晒しながらおねだりをしているのを理解して――

――くすっ♡

と、さなはからかうような笑みを浮かべて――

「んっ……どうでしょうか、さなのお尻は……♡」

——ぴらっ♡

と、スカートをめくって——臀部を見せつける。

「——！！」

中年リーマンが眼をひん剥いて、驚いているのは——

「どうでしょうか……さなに、”ていーぱつく”というものは似合っているでしょうか……」

お客様……？♡」

彼女が——黒のTバックを履いているからだ。

何度か説明を繰り返したが、安土早苗という少女は、雌としての質が極端に高すぎる存在。

彼女を前にして興奮をしない男の方が少ないし、見学店という「指一本触れることが出来ない状況で、男の射精を導く場所」において、人気ナンバーワンを取れる実力を、その薄っぺらな胸と大きなお尻に秘めているのだ。

だが——

彼女の人気を支える最大の要因は「清楚」だ。

ホスト狂いのヤリマン女が堕ちてくる業界において、事情を理解していないのか——さては、マジックミラーという存在を知らないのか——だからそうして、笑顔を振りまきながら、下着を見せつけることが出来るのか——と思わせるさなは特別な少女。見学店特有の現象だが——単純に巨乳でエロい身体の女よりも「普通の風俗店には絶対にいないであろう」と思わせる雌の方が人気になることがあり——さなは、まさにそれだ。

見学店には絶対にいない、箱入り娘の清楚なお嬢様がいるから――

だから、彼らはこぞってさなを指名するのに――

さなは――淫らな雌だけが履くことを赦された黒のTバックで、男を誘惑しているのだ。

「大変申し訳ございません……普段は、お店によって下着を渡されて……それを履いているのですが……本日は、既に、下着のプレゼントをしてしまったので……これは……さなの個人的な私物……普段から、これを履いて学校に通っている私物なのでございます……です……まことに心苦しく思います……こちらは”おぶしょん”の対象外となります……申し訳ございません……♡」

さなは頭を下げて、男へと謝罪をする。

「このドスケベTバックを見せつけておきながら、その温もりがこもったショーツをプレゼントできなくてごめんなさい――さなのおまんこがラブラブちゅちゅしてたクロッチ部分で、お客様のおちんちんの亀頭、鈴口を重ね合わせて、間接キスセックスを出来るかもしれないと期待をさせて、申し訳ございません……♡」と煽るような彼女の物言い。中年リーマンは、本気で悔しかったのだろう。大人になってからは「ガチで悔しがる」ということは少なくなるのだが――彼は痲癩を抱く子供のように、自身の太腿をぶん殴って、怒りを発散させる。

「”てぃーぱっく”を見せつけた後は……がに股になるのがよいのですよね？ああっ……下品でお気に召さないとあらば、ほわいとぼーどに遠慮なくご記入ください……そして……

――もつと下品な方がよいのであれば……その旨も……♡」

中年リーマンが記入した文字は――CCDカメラの角度からは読みとれない。

だが、意図は概ね、読みとれる。

さなはサディステイックな笑みを浮かべる。清楚な少女が男を手玉に取っている光景——中年リーマンにとっては「手玉に取られている状況」なわけで、彼が勃起した肉棒をシゴく手は激しい。まだ、勃起が難しくなる年齢ではないだろうが——それでも、性欲が減衰していく年頃なはずなのに——

彼の勃起は、まるで、男子中学生のそのように天井を穿つ角度で——

CCDカメラと亀頭の視線が合って、あなたは、不快な気持ちを抱く。

「さなのパンツはいいパンツ……すごいぞー……つよいぞー……♡」

無邪気な幼子の替え歌を口ずさみながら、さなは腰を低く落として、尻を突き出していく。

マジックミラーへと直接、臀部を押しつけて、擦り付ける行為。彼女のぷっくりと膨らんだ陰唇が、下着の隙間から押し付けられて、形を変えている光景。さなの人気は「過剰なサービス精神」という部分も大きい。彼らだって、安くはない金を払っているのだ。10分間、つまらなそうにパンツを見せる女よりも——「お客様を満足させること」に重きを置いて、楽しませてくれる女を指名したいのが道理。さなは、優れた家系で生まれ育ち、とても品のある淑女として育てられたので——

「自分を求めてくる雄を満足させることも、淑女としては当然の義務」と、考えている節があるからこそ——

「シコシコ、しているのでしょいか……♡がんばれー……♡おちんちん、がんばれー……♡ふぁーいとっ……♡ふぁいと♡ふぁいとっ♡っぺ・に・す♡ふれっ♡ふれっ♡ちんぽ♡がんばれがんばれっ♡おちんぽっ♡」



ゆったりとした口調の彼女が——まるで歌うかのように、雄の興奮を煽る言葉を淫らに吐くのだ。他の席からさなの痴態とサービス精神を見つめている客は——次にさなを指名する昂揚を抱いていることだろう。パソコンのモニタを眺めると——既に指名権を使い切った客二人から、タブレットを通して、指名の追加注文が来ている。彼らは、今の客が終わればさなに指名を出すのだろう。そしてさなは、また、これとは違った手段で男たちを煽って——自慰行為のアシストをする。

あなたには——忸怩たる思いがある。

安土早苗は——あなたの幼馴染。

年こそ五つほど離れているが、昔は妹のように自分に懐いてきた少女なのだ。経営も素人の身で任された見学店の「ルナティーク学園」。改装を業者に言われるがままに任せて、借金を更に膨らませた泥沼の自分を助けてくれるために——

そうして、高校生の身でありながら、ここで働いてくれる彼女を——

「おっ……！さなちゃん……さなちゃん……！」

男達の下衆な欲望の生贄に捧げているのだ。

さなが嬉しそうに男客を煽っているのも、自分に気を使わせないための演技だと——自惚れてしまっている。さなの分厚い尻肉に食い込んだTバック。マジックミラーに押し当てられているのは、彼女の生尻。さなは円を描くように腰を振っていたが——徐々にそれは、前後へと激しく動いていく。セックスのピストンを模した腰振り、下品の最高潮——さなは自分の秘部へと指をのばして、そこを、とん、とんと叩く。自慰行為とは異なる、性的快楽は得られない動きは——しかし、さなの秘部

を下着越しに感じさせるものであり——中年リーマンはそこで限界を迎えるのだろう。おっ♡おごっ♡と獣のような声をあげて——それは、マジックミラー下部のコイン投入口から漏れ聞こえてくるのだろう。

さなは——最後に一度——腰を激しくミラーに押しつけて——
ぐりぐり~~~~♡

と——Tバック越しに秘部を擦り付けて——
肉厚な秘部の形がくつきりと浮き上がるので——

びゅるるるっ♡どぶどぶっ♡びゅるるっ♡

——中年リーマンは激しく射精をした。

マジックミラーへの、直接のぶっかけ。禁止されているわけではないのだが、それを綺麗にしなくてはいけないことが屈辱。安土早苗を懸想して吐き出した精液を拭き取るのは、さながら、彼女を寝取られた哀れな男の気分。ピピピピと、10分を告げるタイマーの電子音が響きわたり——そこで、さなは中年リーマンへと頭を下げる。

「……………さなをご指名いただき、ありがとうございました……………♡さなも、名残惜しいですが……………当店には、素敵なキャストが沢山おります……………さなは、逃げません……………次回以降のご来店時も、ここにいます……………です……………さな以外の女の子の魅力も見つけてくださると……………さなは、とても嬉しく思います……………♡」

深々とお辞儀をしながら——他の女の子がお茶を挽かないように気を使うさな。

貧相な身体と若すぎる年齢で、人気ナンバーワンの少女が——他のキャストからの妬みや嫉みを買わない理由。更に、暇を持て余しているキャストが少ない方が店が儲かるわけで——さなはこんな状況でも、あなたのことを気遣ってくれている。

中年リーマンは「わ、わかったよさなちゃん！」と思わず叫んでしまったようで——
それはさなの耳にも届く。

「ありがとうございます……それでは……これは、お礼です……

——ちゅっ♡」

さなは——マジックミラーへと、キスをする。

彼の精液がぶっかけられた鏡とは、想像すらしていないのだろうか。あるいは——理解した上で、そうしているのか。中年リーマンにとっては、さなの顔がまるで、顔射後にも見えたことだろう。

抱えた屈辱の理由は自分自身だと理解しておきながら——あなたには、どうすることも出来ず——イライラを持て余して、自分の太腿に、がんつ、と、拳を落とした。

2・ 人気ナンバーツー「めぐ」の指名

中年リーマンは、射精後に呆けた様子で大部屋を眺めている。

彼の存在を気にしてしまう理由が、あなたには自分でも理解が出来ない。

タブレットで追加のおひねりコインを、簡単に購入できる財力は、常連になればいい客になりそうだなと——適切な理由を付けてみるが、しつくりくるはずもない。

「はいっ……さなのキス乞い顔……が、見たいのですね……あの……とても、下品かもしれませんが……よろしいでしょうか……？」

……んっ……それでは……

れえ〜……♡じゅるるるっ♡れるれるっ♡れろ〜っ♡ちゅーしよっ……ちゅーっ……”べろちゅー
”しましよ……っ♡さなといっばい、よだれ、こーかんしよ……っ♡さなに……どろどろに……雄
の臭いがいっばいな……よだれ、のませてくだふあい……っ♡”

さなは、今、指名された別客へとキスをおねだりする下品で無様な顔を晒している。

人気ナンバーワンは伊達ではない。おひねりコインの獲得額も圧倒的に大きいのがさな。一枚一〇〇〇円の内、嬢の手元に入るのは半額の五〇〇円。彼女たちにとっては小遣い程度の金額だが、零細見学店ではその金額ですら命金。さなには頭が上がらないなと思いつながら、あなたは、再度、大部屋のカメラを見つめている——

「——おっはよ、店长……」

——金髪の少女が、入ってくる。

ロッカールームで既に着替え済みで、みんなと同じ制服に身を包んだ少女。金髪ショートの彼女は、日本人顔なわけで——制服に身を包むと一気に不良のように見える。

およそ、高校在学中には不可能であった明るい色の染髪と、学校制服の相性は悪い。

だが——客には一周して好評であり——

「今日もさなは指名入ってんの？……すげえなあ、さな……アタシの連続ナンバーツォも、なんかの記録作られんじやないの？」

——ナンバーツォの日向恵——

源氏名「めぐ」は、あなたの肩越しに監視カメラを眺めて、呟いた。

高校時代までは女子サッカー部。今は現役女子大生であり——あなたの二学年後輩。

今は休学してしまっただあなたの学年を、めぐが、追い越すのはすぐのこと。そのときには彼女に敬語を使うべきなのだろうかと考えながら——あなたは、めぐに告げる。

「……四番席の客、エロ親父っばいな……えーっ……こいつ、コインいっぱい買ってたの？……はあ……媚びるっきゃないか……」

めぐは気怠げに、溜息を吐く。

彼女の胸が上下すると——必然、あなたの視線もそこに向かう。

「……そっか、あんたもエロだったな……別にいいよ……男なんて、みんな多かれ少なかれエロなん

だから……それを隠されるよりは、ずっといい」

——めぐは、諦めたように呟く。

失望をされたのか——ばくつ、と、心臓が一度大きく弾む。

こんな仕事をして、問題が起きないように、大勢の男達の獣欲を眺める立場で——だから、せめて、自分だけはキャストの彼女達にそういった感情を抱かないようにしていたのに——雄の本能が、めぐの、八八センチGカップから視線を逸らせないのだから——と、自己嫌悪に浸ろうとした瞬間——

——むにゅっ♡

と——あなたの背中に、めぐのGカップが押し当てられる。

「忘れんなよ……あいつらのエロと……あんたのエロは別物だかな……あんたがエロじゃなくなる方が、アタシらには辛いんだかな……」

——ちゅっ♡

めぐは、あなたの耳に小さくキスをして——それから、大部屋へと向かっていく。

彼女の手が触れた首筋が、胸が触れた背中が、唇が触れた耳が——灼けるように熱を持って火照るのがわかる。日向恵は、魅力的な少女。同じ高校に通っていたとき、自分は三年生で彼女は一年生。

大学も、自分が三年生のときに休学することになったので——触れあった機会こそ少ないが——

それでも、めぐに惹かれている自分があることを理解はしている。

それが恋や愛のような単純なものならばよかったのだが——もっと複雑な感情なのだ。

日向恵という少女は、光り輝いた世界で生きていくべき少女。



見学店で大勢の少女を、彼らが言うところの「食い物」にしている店長の——下水道の溝鼠であるあなたにとって——マンホールの隙間から差し込む光は、どこまでも、暖かく居心地がよいものだ。公正世界仮説、と言うらしいが——「幸運に恵まれる人は良いことをしたし、不幸にばかり陥る人は悪いことをした」と人間は偏見で思うらしく——

めぐのような魅力的な少女は、光り輝く場所で、普通に幸せになって、普通に素敵な男と、普通な家庭を持つてほしいと思うのだ。

それが——今では——

あなたは、パソコンを眺めて一度舌打ちを吐いた。

「……四番席様、『めぐちゃん』のご指名です」

「出勤早々か、今日は早いなあ」

——めぐは、友達のような距離感の、他のキャストとの雑談も早々に切り上げて、早足で四番席の鏡の前に立つ。

「めぐだ。よろしくな、変態野郎♥」

めぐは——言うが早いか、その場でヤンキー座りをする。

彼女に求められているのは、さなのような品行方正な淑女としての立ち居振る舞いではない。

「風俗店で働いて、わざわざ金髪に染めているバカ女」を指名する理由。

彼らがめぐに求めているのは、そうした、後腐れなく簡単にシコれるピッチとしての役割。

さなが美しすぎてシコれない、という客は一定層いるわけで——そういった彼らにとっては「金で

簡単に尻を振るめぐ」は、気兼ねなく付き合うことが出来るのだろう。

めぐは、さなとは異なり挨拶もそこそこに、タイマーを押して一〇分をカウントする。

「それで、アタシに何してほしいんだ？言っとくけど、アタシはさなと違って気いとかきかないから……言わないとわかんねえぞ？」

——そうして無愛想な態度のめぐは、スカートにヤンキー座りで——
つまり、パンツが丸見えということ。

中年リーマンは、そこでようやく——めぐの楽しみ方を理解したのだろう。

憎まれ口を叩きながらも、パンツが丸見えなことに気が付いていないバカ女。

それが演技であるとしても、男としての優越感を満たすには十分すぎるもので——

だから、男はマジックミラーにぶっかけられた精液に——コインを二枚、押しつける。

たかが二〇〇〇円の端金——と、口で言うのは簡単。目の前にある二〇〇〇円が、犬の糞の下敷きになっていたとしても、見なかった振りをする人間の方が少ない。「綺麗に洗って両替すればただの金だ」という道理であり——

だから——

「ほんつと……変態野郎だな、おまえ……」

めぐの前に突き出された二枚のコインは、男の精液がべつとりとへばりついたもの。

一発出禁にしても問題ない行為だが、個室に監視カメラがあることは客には絶対に内緒。精液を丁寧に塗りたくったコインは「なんかぬるぬるする程度」であり、脂ぎった肌の持ち主であるから出禁

にしていたら、風俗店は成り立たない。

めぐは最初、そのコインをじつと眺めていたが――

「……もう一枚寄越せよ、変態」

と――催促の言葉を口にする。

客を客と思わない生意気な態度だが――それが気に入る客が多いのも事実。中年リーマンはにやりと笑みを浮かべて、コインを更に二枚、窓口から差し出す。結果的にはさなよりも多くのコインを稼いでいるわけで――難しいな、とあなたは考える。めぐが嫌がっているのも、変態野郎だと拒絶しているのも本心から。その――エロ親父を嫌がる気持ちこそっくりそのまま、エロ親父を喜ばせることになるのだ。「……あんがとよっ」と、視線を逸らしながらもちゃんと、礼の言葉を言える態度も、めぐの育ちの良さを感じさせて――「少し歯車が違ったので不良になっただけだ、根っこは純粋で良い子」を「金で自由にする」という優越感は激しく、気持ちよはずだ。

「これ、本当はコイン2枚のオプションなんだけど……」

あんたはどうせ、こういうのが好きなんだろう？」

めぐは、柵に置かれていたデイルドを手取る。

男性器を模したシリコン製のデイルドは、学校の教室には相応しくない代物。店によってはバナナや魚肉ソーセージで代用するらしいが、零細見学店がそんな小細工をしていられる余裕はない。裏オプシオンや、嬢を部屋に招いた直接的な接触がない分、本物のデイルドを使ったプレイ、くらいの過激さがないと、客に選ばれないわけ――

だから、今、めぐは——

下衆なエロ親父を喜ばせるためだけに、ディルドを手を取っているのだ。

男としても「おひねりのコイン四枚」ならば法外だが「おひねり二枚」と「オプション二枚」ならば納得のいくところ。客を変態と罵って、侮辱をしながらも、客を喜ばせることには余念がないめぐの態度。「ツンデレ」と言うのだろうかとあなたは考えながら、めぐを見守る。「ルナティーク学園」は飽くまで健全な見学店。過剰な性的奉仕はNGを出さなければいけないのだが——

「……んっ♡……あっ♡……ん、ふう……♡んくっ♡」

めぐは——

自身の秘部に、ディルドの亀頭を押し当てる。

一発レッドカードを出されてもおかしくない行為だが——

あなたが動かないのは、彼女のそれが、下着越して行われている行為だから。

「——きつと、すっげえ眼でアタシのここ見つめてんだろぅな……ばーかっ♡おまえなんか……んっ♡生を見せるわけねえだろ……♡おまえみたいな変態は……あっ♡んんっ……♡アタシのパンツ見ながら、シコシコしてればいいんだよ……ばーかっ♡」

めぐは決して、ショーツを脱ぐことはない。

ヒョウ柄で布地の少ない下着は「生意気な金髪ヤンキー」という雰囲気漂わせるもの。めぐは可愛いキャラが好きなので、普段はもつと子供っぽいものを履いていると——知っている男は、あなただけ。深夜のドンキで彼氏と一緒にうろうろしていそうな、頭の悪いバカ女——善良で真面目に生き

て、スーツを着て炎天下の外を歩き、必要とあらば年下の上司に頭を下げる僕たちを見下している、セックスにしか能がない、子供5人くらい簡単に産みそうなバカ女——

と、めぐにレットルを貼るには、そのヒョウ柄ショーツの一枚だけで、男性客には十分だ。

普段は決して、自分達と交わらない世界を生きている女が——

今は、中年リーマンの財力に従って、ディルドオナニーをしているのだ。

雄としての優越感が激しく満たされるのは、さなのそれとはまた違った種類。中年リーマンは激しく竿をシゴきながら、ああっ———どうにかこの瞬間、透視能力に目覚めて、めぐのショーツの向こう側が見えないことか———と思っっているのだろう。どうせ、生意気なヤリマンギャルのグロマンだろう。大した価値もないそれを、けちけちと勿体ぶるな———俺のオナニーのおかずくらいには役立ててやるから、おまえのグロマンにはそれで満足だろう———まで、考えていると邪推するのは、自分の性格が悪いかからか。

「どうせ……今、シコシコオナっただろうなお前……どうよ、アタシのショーツ……んっ……」

アタシのパンティはどうよ？感想、なんか言えよ……アタシだって、恥ずかしいんだから……」
「ショーツ」をわざわざ「パンティ」と言い換えて、頬を赤らめながら視線を伏せるめぐの態度。

それが計算ではなく天然なのだから恐ろしい。不良が大雨の下、捨て猫を拾っているのと理屈は同じで——めぐが不意に見せる純情な態度は——

下品に言えば「どちゃくそにシコれるもの」だ。

『すぐくエロい、最高、大好き』

ペニスを手にしごいている男性のIQは、おそらく、世界中の生物で最も低いはずで――

中年リーマンがボードに書いた、単純な単語の羅列は、むしろ「よく絞り出せたな」と褒めてあげべき代物。

だが、口説き文句としては最底辺の言葉――

「……………そっか、なら、よかった♥」

それなのに――にこつ♥と、笑みを浮かべるめぐ。

「おっ!」と短く声を漏らした中年リーマン――すわ、心筋梗塞かと不安にもなったが――単純に、めぐのギャップにやられたらしい。そうなると、めぐの全てを好意的に受け取れるもので――めぐのディルドオナニーが、ただ、単調に秘部を下着の上から押しているだけの動きですら

「普段は純情で、指以外のオナニーをしたこともなく、だから、そうして恐る恐るやってるのだ」「きつと悪い彼氏に騙されて見学店なんかに入れられて、このままならば本番ありの店に落とされてしまう」

「個人的にはソープでめぐと出会えれば超絶当たりだが――店を変えられれば、めぐに出会う機会はほとんどなくなってしまう」

などと――

様々な思考を浮かべているのは、今まで、めぐを選んだ客のアンケートから推測が出来る。

そうして、男は――

「……………あつ♥……………あんがとな、お客さん♥」

めぐに——さらに三枚の、コインを渡す。

一枚千円のコインを、一〇分にも満たない時間で七枚渡すに値する——「めぐ」という少女。

さなのような愛想がない分、客に指名される頻度は少ないが、一度常連になれば彼女の魅力にやられる男がほとんど。さなのような「絶対にこの店の外では縁がないだろうな」と思う少女よりも「彼氏に殴られて泣いてるところで声かければ、ワンチャン、ありそうじゃね？」と思われる方が、ガチ恋勢を招き入れやすいので——その分の懸念は必要だが——

それにしたって、店側の売上げ的にはとても助かる少女だ。

めぐがコインをもらったときの笑顔は、心からのもの。

——彼女は、実家に多大な借金を背負っている。

「親が作った借金を娘が返す必要はない」という理屈が——あなたと同じで、通用しない場所からの借金。彼女の両親に大した財産はなく、めぐもまた、あなたと同じたかが一千万円の借金でソープに沈められそうになっていた。

——事務所で泣いているめぐの借金を肩代わりした理由は、自分でも、正直定かではない。

確か——あの時期、自分に生命保険がかかって死亡保険金が一億円掛けられていると知ったのだ。勿論、それは見学店がにっちもさっちもいなくなくなり、借金を更に膨らませて返済不可能になってからの最後の——文字通りの「保険」だ。だが——「一千万円の借金がある男の命を担保」に「一億円の死亡保険」というのは、絶対に計算が合わない——差額の九〇〇〇万円は「金を返さないから仕方がない」ではなく「単純に人を殺して稼いだ金」なわけで、それが無性に腹が立って——

だから、一千万円の借金も、めぐと合わせた二千万円の借金も大差がないと――

ああ、そうか――

あのとときの自分は「やけになっていた」のだと、あなたは気が付く。

だが、日向恵にとつては助けられた理由はどうでもよくて――目の前の男一千万円の借金を肩代わりしたことだけが事実。そこで、あなたの元恋人のように「知ったこっちゃない、こいつがお人好しなだけ」と主張できればよかったのだろう――性格のよさで見学店のナンバーツになるような少女。ソープはイヤだけど、一千万円は絶対に返したいと主張をするので――

「ほらっ……これ、舐めてやるよ……♥……じゆるるるっ♥れろおく……♥じゅっぷっ……♥じゅぼっ♥……んっ……♥精々、自分のだと思つて興奮しろよ、変態っ♥」

――めぐには、見学店のキャストになつてもらうことにした。

最初は動揺と狼狽をしていたが――結局のところ、身体接触皆無で、これほどに稼げるアルバイトも、大学生の身では中々存在しない。どのみちキャバクラやホステスで、男の性欲と女の悪意に晒されて稼ぐのならば――見学店で働いた方が

――何より、あなたのためになると彼女は思つたらしい。

だから、今――

彼女は、変態だと見下している中年リーマンの前で、ディルドを咥えてしゃぶっている。

思い出すのは――恵に、性経験の有無を聞いたこと。

『なっ……そんな経験、あるわけねえだろ！か……彼氏は、いたことあるか？一回……一週間……わ、

笑うなよ！アタシにとっては、結構頑張ったんだぞ！……う、ううっ……手も繋がらない内に、他の女に奪われたけど……」

恋人に裏切られて、次の恋に二の足を踏んでいるのも——

誰かのせいで、一千万円の借金を背負っているのも同じ。

めぐがどうやら、あなたに、少なからぬ好意を抱いているのはわかっている。

金髪ショートな、どこか不良気味な雰囲気な漂わせるが、しかし純情な少女の恋人——八八センチのGカップ——自分が一億円の死亡保険を掛けられていなければ、もっと、喜べたのだろうなと思いつながら、紙コップの珈琲を啜る。

だから——

「んっ♥じゅぶっ♥じゅぼっ♥……ぶはぁ♥……顎、疲れるんだけどな……れえ……♥ほらほら……こうやって、段差になってるところペロでチロチロされんの好きなんだろ……？アタシのパンティもちゃんと見ろよ……ほらっ、この色が変わってるところ……どうだ？シミになってると思うか？」

めぐが下品な娼婦のように、男にハメ乞いを要求されていても——

あなたには、それを止める権利がない。

それを幹旋しているのが、他ならぬあなた自身であるからだ。

中年リーマンはめぐのデイルドフェラに射精寸前。一度、精液を吐き出ししているのだ。彼くらの年齢ならば、回復は遅いのだろうが——めぐにフェラチオをされて、勃起しなければ雄としては終わりだ。彼は荒い呼吸で、菌茎をむき出しにしながら一心不乱に肉棒をシゴいている。やめろ——お前

のような男が汚していい少女じゃないんだ——と、心の中で思っても——見学店の店長の立場で、言えるはずもなく——やがて、中年リーマンは——

びゅるるるるっ♥どぶっ♥びゅるるるるっ♥

——マジックミラーへと向けて、今日二発目の射精を行った。

中年男性のそれとは思えないほどに、量も質も逞しいもの。めぐのような美少女は、援助交際でもパパ活でも出会うことは出来ないだろう。だから、そうして——めぐの痴態を覗き見ることしか出来ない彼を、憎んではいけないと——思いながらも怒りを抱くのは、彼女の親のような気持ちだろうか。いや、自分の娘に一千万円の借金の責任を背負わせて、ソープに沈めようとした親と比べられるのはイヤだなと思いつつ——

中年リーマンが、マジックミラー越しのコインに精液を、べったりと塗りたくる姿を眺めるだけ。最後のおひねりとして、差し出されたコイン。

めぐはそこでようやく、彼の射精に気が付いた。デイルドを口から離して、亀頭と唇の間につつ——と唾液の橋がかかると——そこでピピピと電子音が鳴り響く。

たった一〇分で、コイン八枚、八〇〇〇円を稼いだ少女。

めぐはコインのぬるぬるが、何であるのか気が付いている。男の子と手を繋いだことすらない少女を、そうして汚してしまったのは自分の責任。だが、蠱惑的な笑みを浮かべながら——

「すんすん……♥」

と、コインにべったりとまとわりついた精液の匂いを、鼻を寄せて嗅ぎ——

「……………ぺろっ♡」

と、コインを一舐めする彼女に——中年リーマンは、再度、ほとんどの間を空けずに肉棒をバッキバキに屹立たせる。

画面越しのあなたですら、激しい劣情を催すめぐの小悪魔な態度。男は慌ててタブレットを操作して、めぐをリピート指名しようとするのだが——

「……八番席様『めぐちゃん』のご指名です」

「あっ……じゃあな、変態野郎♡また指名しろよ♡」

言うが早いかめぐは踵を返して、八番席へと駆けていく。

あばたもえくぼ。めぐにすっかりと惚れた中年リーマンにとっては「出番が終わったからさっさと帰る薄情女」ではなく「次の客に求められているので、常に全力を出す立派な少女」になっているはずで、今では脳内で勝手に「親から受け継いだ多額の借金を返すために、見学店で望まない仕事に就かされている」とでも変換されていることだろう。それなら——正解だなど思いながら——中年リーマンが、残された時間で誰を指名するか、うんうんと唸りながら悩む姿を、あなたは眺めていた。

3・人気ナンバーズリー「ゆう」の指名

「ほう」

と、早苗が息を吐くと、それだけで、静寂な事務所には一服の清涼剤となる。

閉店間際の時間。休憩時間のさなは、パイプ椅子に腰掛けている。他の女性スタッフとは違い——大股を開いたり——片足を椅子の上に乗せたり——あるいは両足を机の上に放っているのではなく、両腿をしつかりと閉じて、背筋をピンと伸ばした少女。休憩ではなく、余計に疲れるのではないかと不安になるが——幼い頃から、そうやって教え込まれて成長してきた少女には、それが気楽であるようだ。

早苗は今、紙コップに入った煎茶を飲んでいる。

茶道の作法も一通り教え込まれていて、小学四年生の夏休みに京都の家元に泊まり込みで習ってきたという少女。それが今では、近くのドラッグストアで特売されていた、安物のティーバッグで絞り出した煎茶を美味しそうに飲んでいるのだ。早苗の姿はまるで、凜として品のある小型犬のようなもの。愛玩動物として見ている分にはいいが——

あなたの脳裏に浮かぶのは、早苗が飲んでいる「ティーバッグ」と、彼女が先ほど履いていた「ティーバック」のくだらない洒落だけ。

大部屋の教室にいるときは異なり、きつちりと制服を着ている、淑女という言葉に相応しい少女

をじいっと見つめていると——

「……どう、なさいましたか？」

いつの間にか——早苗があなたを見つめ返していた。

ぴよこんと立ち上がり、とてとと歩み、ちよこんとあなたの隣に座る少女。早苗はあなたを上目遣いで見つめる。細くて小さな少女は、本当に犬のようだなと思っていると——すりすりっ♡と、彼女はあなたに頭を押しつけてくる。「撫でろ」「かまえ」と催促されているような気がして、あなたが撫でてやると、五つ年下の幼馴染は嬉しそうに目を細める。

「……もしも——いつものように……私に気を使っているのならば、それは不要です……いえっ……むしろ、迷惑です……♡私は……あなたに気を使われることが……一番、いやです……」

早苗はあなたを見つめて、まっすぐに答える。

人と話すときは、目を合わせなさいと教育されている。見学店にいるべきではない少女——自分のせいで彼女を巻き込んでいるのだ——自分がさっさと、八階建てビルの七階にあるここから飛び降りて、一億円を稼げば全てが解決するのに——と、自己嫌悪に浸れるほどに死にたがりでもない。なので、あなたは誤魔化すように早苗を撫でるだけ。頭の悪い男の誤魔化しだが——早苗も、敢えて、頭の悪い女を演じているからとんとんだ。彼女は居心地が良さそうに、目を細めて、それからあなたにもたれかかると——

「——ごめんなさいっ！遅刻しましたっ！」

と——事務所に飛び込んでくる女性によって、静寂がぶち壊された。

「ああっ、店長！ごめ、ごめんなさい……わた、わたし……早く帰る予定だったのに、仕事押しつけられて」

肩を弾ませながら、荒い呼吸の彼女は——きつと、全力疾走してきたのだろう。

肩が丸出で、腕を上げれば腋のくぼみが晒されるノースリーブのタートルネック。自分の身体に圧倒的な自信がある女か——反対に、自分の身体を心底卑下していてファッションにこだわらず、涼しいからという理由で着る女か——その二種類しか好まない格好だが——

彼女——雪城優香は、後者なのだろう。

自分の身体を嫌っているから——

どたぶんっ♡

と、一メートルの爆乳を携えていても、その格好を選択することが出来るのだ。

淡い栗毛を肩まで伸ばして、瞳はどこか垂れ気味。早苗とどこか似ているが——早苗は瞳の奥にぶれない芯がある。一方で優香にはそれはまるでなく、ことあるごとに視線がぶれて——いつでも、何かに脅えているような顔をしている。お気に入りの喫茶店で、ダーズリンを飲みながら窓の外を眺めているときの、物憂げな表情だけならば——どこまでも大人の余裕を漂わせた美女なのに——

それがナンパ魔に声をかけられた途端に、余裕なくきよどるのだ。

「……ゆうさん、遅刻は罰金だと——」

早苗は少し不機嫌そうだが——あなたは彼女の唇を掌で塞いで「連絡してくれたし、元々優香は兼業なんだから仕方がないよ」と優しく告げる。これが不真面目なキャストならば、しっかりと怒るの

が店長の役割なのだが――

色々和不器用な優香が、押しつけられた仕事から逃げ出すわけにもいかないのだろう。

「あ、いそ、急ぎますねっ」

と、優香はあなたに告げてから――その場で、服を脱いでいく。

グラビアアイドルやAV女優でも、滅多に見ることが出来ないような彼女の極上の肢体。通常ならばあり得ないことだが――着替えを見られるよりも恥ずかしいことは、とつくに何度もしている。なので――早苗は不満げに

「えいっ……」

と、あなたの両目を掌で隠すのも、お約束となった義務的なもの。

視覚が閉ざされると、他の感覚が鋭敏になり――優香の着替えの衣擦れの音に、あなたはたまらない興奮を抱く。1000-60-94という――日本人と言うよりは、海外のトップポルノスターを彷彿とさせる優香のスリーサイズ。見学店という特殊な業態の性風俗店よりも、さっさとソープに堕ちてくれ――と大勢の客から思われている女。本業は「企業の事務職」であるため、ここで働けるのは週末や、仕事が終わった後の短い時間なのだが――その限られた時間だけでも、「ルナティーク学園」のナンバースリーに輝いている二五歳の彼女が――

「――お待たせしましたっ♡♡もう、目を開けても大丈夫ですよっ♡♡」

今は――女子高生の制服に身を包んでいるのだ。

――二五歳の女が、女子高生の制服――だ。

あなたは壁掛け時計を眺める。閉店までの時間はあと一時間もない。それでも、優香——いや、「ゆう」は3回は指名されるのだろうなとあなたは考える。超絶レオキアラである代わりに、彼女がいると、場の空間は一挙に桃色に変化する。ゆうの存在のおかげで、客の多くがオプシオンを付ける空気が出来るので、今日も売上げノルマは達成できそうだなと思っ

「あの、オーナー……いつもの、してもらってもいいでしょうか……？♡♡」

ゆうは、首を傾げて、臆病に尋ねてくる。

あなたは立ち上がり、ゆうと正面から向き合う。

一五九センチで一メートルのバストを持っている彼女。当然のように——大勢の男から、その肢体を狙われている。美女の顔面にどすけな身体つき——だが、性格は押しに弱く、断りきれない体質。貞操観念がお堅いので、ベッドに持ち込まれても必死に抵抗して——彼女曰く、金的に躊躇を持たないようにだけはしているらしい——逃れているのだが、据え膳に箸をつける直前、奪われる男達にとってはたまったものではないだろう。

そんな——雄として生まれてきた以上は、誰しもが一度は抱きたいと恋焦がれるような極上の雌猫のゆうが——

両腕を広げて、あなたと向き合っているのだ。

「いつもの……とは……なんででしょうか……」と早苗は不機嫌に頬を膨らませているが、構ってられる余裕はない。ゆうは、大学休学中のあなたよりも年上。それが今では——性的興奮を煽るように改造されて、身体のラインが浮き出るために、ワンサイズ小さなJKの制服に身を包んで——

男が苦手なくせに、これから、男にシコられに行くのだ。

——彼女に勇気を与える必要があるの——

ぎゅ~~~~♡♡♡

あなたは、ゆうの身体を強く抱きしめる。

「あつ……ふふつ……店長は、いつも……暖かいですね……落ち着きます♡♡」

「……何を……しているのですか……」

ゆう曰く「こうしてもらえると、男の人にやらしい目で見られても——いざとなれば、店長が助けられるのだと思えて勇気が出る」ということらしい。

あなたにはよくわからない。ケツ持ちがいる安心感という意味か、と尋ねると、彼女は不服そうに頬を膨らませたことがあって——だから、そういう意味でないことはわかるが、正解は未だにわからないまま。

時間になると一〇秒にも満たないハグだが——ゆうにはそれで十分だったらしい。

ゆうの柔らかな花の匂い。大きな乳房がむにゅ♡♡と胸板に押しつぶされる感触。僅かに漂う汗の香りと、雌の臭いは、一日中仕事をしてからすぐにここに来た証拠で——働く理由はないのに——嫌いな仕事のはずなのに——あなたのために、今日も来てくれた彼女への感謝を示して、頭を撫でてやった。

「……それじゃあ、行ってきますね♡♡」

ゆうは明るい笑顔を浮かべて、それから、大部屋へと小走りで駆けていく。

早苗は不服そうに「胸のサイズは……中学生のときには……既に、定まっているそうです……」とあなたに告げるが——こっちが言いたいことはよくわかるので、とりあえず頭を撫でてやると、「さなは……これでごまかされるほどに……安い女ではございませんが……」と頬を膨らませながらも、やはり上機嫌そうに目を細めた。

「ゆうって言いま〜す……今日は、よろしくお願いしますねお客さんっ♡♡」

——ゆうは、どすけべな身体つきをしている。

見学店というのは、実態はどうであれ表向きは「健全な場所」を謳っている。客の自慰行為も、飽くまで、禁止していかないだけ。店内のどこにも「女の子のえっちな姿でシユる店です」とは書いていないし、また、書くわけにもいかない。だからたまに、意図を勘違いして、見るだけ見て帰って行く奇特な客も出てくるのだが——

どたぶんっ♡♡ぶるるんっ♡♡と言った擬音が似合うほど、爆乳を揺らしたゆうが室内に乱入してくると、そんな建前は音を立てて崩れ去るのだ。

「うっは〜Wゆうちゃん、またおっぱいおっきくなったね〜W」

「えっへっへ〜Wお金払うからさ〜、揉ませてくれよな〜W」

「エロ親父か、あんたら」

二人の女性スタッフが冗談めかして、手をわきわきとして——めぐがツツコミを入れる。

見学店の建前の、女の子の日常に相応しい光景だとぼんやり思う。

ゆうは、この店の中では最年長の女性キャスト。

元々、女子高生の格好をしている見学店。年を重ねれば系列店に移動することが道理であり、さな以外、他は全員大学生か、大学生の年齢で——

あなたよりも年上のゆうは、二十代前半とは言えど、果たしていつまで女子高生の格好をしているのか。

まあ——どすけべな胸と尻があれば「無理があるでしょW」という恥じらいすらも興奮につながるの、男の子の単純な思考回路。パソコンのモニタを見ると——ゆうが入室してから三〇秒も経っていないのに、既に、二件の指名が入っている。

あなたは——いつも通り、何の感情も込めずにアナウンスをする。

「四番席様……『ゆうちゃん』のご指名です」

——延長に次ぐ延長を重ねた中年リーマンが、今日、五回目の指名をする。

彼の背景を想像するが、あなたには見当も付かない。左手の薬指にはなにもないので、独身か、あるいは離婚者。幼い頃に抑圧して育ってきた中年男性が、ホビーにハマると一財産を崩すのはよくある話。あるいは、気まぐれで買ったスクラッチくじで一等が当たったのか。それとも、親からの遺産

が入って——と、見当が付かないのは「何でも考えられるから」であり——

もっと、ソープやピンサロにハマって散財するならば、構図は単純だったのになと思わざるを得ない。

そして、ゆうは、四番席の中年リーマンへと挨拶をする。

タイマーを計測開始してから「ええと、どうすればいいでしょうか？」と客に尋ねるゆう。本来であれば御法度であり「指示がない限りは、自分で考えて楽しんでませる」がキャストの役割なのだが——その初々しさを武器に変えるのが、極上の美女というもの。江戸の吉原の遊女のような高貴さを漂わせるさなど——現代の吉原のソープ嬢のような、気軽さを漂わせるめぐと比較すると——ゆうは、そういう誘惑があまりにも下手くそ。『ポーズとって』とホワイトボードに書かれて、悩んで——

「……にゃんっ♡♥」

手首を折り曲げて、猫のポーズをするのだ。

画面越しにも、中年リーマンの落胆が見て取れる。

ゆうは仕事にやる気がないわけではない。単純に男性を誘惑するのが下手くそなだけ。ここが身体接触ありの風俗ならば、それでもギリギリ「乳がデカすぎる」ので耐えられただろうが——触ることも出来ない距離にあるデカ乳は、無駄であると断言をしてもいい。

ゆうはそのまま「にゃんにゃんっ♡♥」と可愛らしく媚びたポーズをする。

胸を突きだしても、尻を振っても——それは三〇センチ近く胸の小さいさなよりも、魅力が薄いもの。ゆうは自分の身体がどすげなことを、わかっていない——いや、わかろうとしていない、と言

うべきか。

——雪城優香は、自分のエロい身体を嫌悪している。

胸と尻に脂肪がつきやすい体質というものは、どうすることも出来ないらしい。食事を減らしたり、運動をしても——結局、その「ぼん・きゅ・ぼんっ♡♡」に変化は訪れない——それどころか、ウエストがくびれて男性の欲情を更に煽るばかり。

だから、優香は厄介な男に目を付けられた。

裏社会の組織のボスの息子。普通の企業の事務で働いている優香を、簡単に落とせると思ったのだろう。合法、非合法を問わずに彼は優香の周囲から助けを一つずつ奪っていき、最後には自分に全部を従わせるつもりだったのだが——

優香は、臆病なくせに大胆な性格だ。

彼らが経営するクラブに誘い込まれて、押し倒されると同時に——

ボスの息子の金玉に、激しい膝蹴りをぶちかました。

普段は地味で目立たないクラスメイトが、大声を出すときに音量の強弱を誤るように——優香の抵抗も加減を知らないもの。風の噂だが、そのときの金的でボスの息子は睾丸を片方失ったらしい。優香はクラブから逃げ出すが、その組織も、ボスの息子の体面と金玉を潰されているのだ。裏社会には縁がなかった優香は、逆恨みのような形で彼らに狙われて——

そこで——あなたに出会った。

奇しくも、そのときは死亡保険一億の存在を知って自暴自棄の真っ直中。「死んだ後の世界」を考

えて、ここで人を救えば天国に行けるだろうか——なぞと考えたのも事実。無理を通せば道理が引つ込む——あなたに借金を被せた、パンチパーマの関西人に相談をして——借金を更に一千万円を背負うことで、組織同士は手打ちをした。金玉一個に一千万円は、随分とポツタくられた気がするが——優香の身の安全は保障されて——

その結果、あなたの借金は更に嵩んだ。

恵と優香で二千万円、元々を追加すると三千万円だが、ここまできると現実味がなくて、最早、恐怖も感じない。借金苦での自殺は二〇〇〇三〇〇万円が多いというのはよく聞くが——どうしたところで返せない金額までくると、開き直った方が気楽だ。

——それでも

あなたの元カノとは違い、日向恵と同じで——

優香は、一千万円の借金を自分で返済したいと言い出した。

「元々優香は何の責任もないわけで、自分が借金を追加したのは自傷癖のようなもので、優香に返済する筋合いはない」と理論立てたところで——子供のように泣きじゃくる女に、勝てるはずもない。最終的にあなたは、優香の「私が、ひぐつ、わだちが返ちまづがらあ……」という言葉に頷く他になく、しかし——事務職で手取り二〇万の女が一千万円を返すには、途方もない年月が必要になる。

だから——このアルバイトを斡旋したのだ。

金の為というのが当初の目的ではあるが——

優香はどうやら、「あなたの為」の方が強いらしい。

自分を救ってくれたあなたが、借金で裏社会に詰められそうになっているのに何も出来ない、というのが嫌らしく――

つい先日まで処女だった身で、風俗嬢に身を墮としたのだ。

さなとめぐとは違い――あなたは、ゆうに責任を持つ必要がある。自分の意志で足を踏み入れた二人とは違い――あなたが軽率に、金で解決したがために、ゆうは多額の借金を返済することになったのだ。なので、ゆうの多少のわがままや、今日のように残業で遅くなることを責めることは出来なくて――

二人より年上でも、精神年齢は幼いゆうを保護してやらなければいけないのに――

「うっふくんっ♡♡あっはくんっ♡♡……せ、セクシーって……こうじゃないんですか？」

両腕を頭の後ろに組んで、タコのように唇を突き出すゆうは――

おおよそ、色気の欠片も感じ取れないもの。

四番席の中年リーマンの熱が冷めていくのが、監視カメラ越しでも感じ取れる。無理もない話だ。初めての来店で、今日はここまで極上の美少女たちから、めくるめく接待を受けてきたのだ。時間を使い切る最後の最後、極上の肢体を持っている美女を指名したと思ったら――

とんだ、はずれクジ。

彼の落胆は激しいだろうな、と、思っている――

「……マスター……このお客さんは……常連さん、なのでしょうか……？」

さなは、首を傾げてあなたに尋ねる。

彼女が事務所に行ったことも忘れて画面に見入っていたので、一瞬、心臓がバクッと弾む。

だが、さなにとつてはあなたが驚いた理由すら疑問なのだろう。再度、小首を傾げるので「なんでもない」と、あなたは彼女の頭をくしゃくしゃ撫でる。

——さなが常連客を知らないことに、少し、驚く。

だが——冷静に考えると当然だ。

彼女たちは、常に、マジックミラーの反対側にいる。ブラックリストや要注意客に当たる際には指示をするが、それだけ。知らなくて当然、という当然に気が付かなかった自分に恥じるが——同時に、自分が女装して客を接待できないのだから当然だとも、開き直ることが出来る。

「新規のお客様……？それにしても、とてもお金使いが荒くて……常連になってくださる方……で、ごさいますよね……？」

……それならば……

ここで……彼のご機嫌を損ねるのは……よろしくないのでは？」

さなの言葉に、あなたは頷くことしか出来ない。

彼女は巨乳への悪意はないが、ゆうへの敵意は持っている。

しかし、これはそれとは関係がない——「ルナテイク学園」を心配した、裏表のない言葉。

ゆうは身体がエロいだけでも、十分な少女。勿論、指名された客をがっかりさせることは多いが——誰しもが常連客ではないし、すべてのキャストが当たりというわけでもない。乳のどかいどすけべな女よりも、一見貧相な少女の方が興奮出来るから見学店の魅力であると、彼らに教える義務がある

——というのは、あなたがゆうを庇うための言い訳だ。

「……マスター……さなは……様々なことをあなたから教わりました……主に、殿方を喜ばせる作法ですが……」

……常連のお客様は、特に大切に……ですよね……？」

さなはあなたに告げてから——ゆっくりと立ち上がる。

ゆうが接客しているときに、何度かあること。さなは根っから優しい少女。ゆうのことを敵視しても、結局、困っていたら助けたがるようだ。

あなたはさなに何も言わず、彼女が立ち去るのを見届けて——

そして——モニタの中に、さなが映り込むのを見届ける。

「……お客様……当店の不手際、大変申し訳ございません……♡こちらのゆうは……乳房こそ、乳牛のように大きく……また臀部も、ぶくぶくと肥え太った養豚場の豚さんのようですが……まだまだ新人で、作法のほどを弁えておらず……お客様を退屈させてしまったこと……ゆうに代わり……また、”るなていーく”学園を代表して……深く、謝罪申し上げます……」

さなは——

深々と、マジックミラー越しにお辞儀をする。

「ゆ、ゆうちゃん！私、豚さんじゃないわよ！」とゆうは焦った様子だが、さなは意に介することは無い。独特な空気感を持つ少女の謝罪。中年リーマンは、先ほどまでの醜態で冷めていた熱が——燃え上がっていくのがわかるのだろう。半勃起でうなだれていた肉棒が、ムクムクと頭を上げていく。

「つきましては……お客様……」

コインを五枚、いただけないでしょうか？」

——さなの発言は、全く理不尽なもの。

コース料金を支払って、客として、もてなされる立場であるのに——更に追加料金を要求する姿勢。本来ならば、態度の悪さに激昂をしてもおかしくないのだが——さなが作り出した空気に飲み込まれれば、もうだめだ。五〇〇〇円を支払う価値があるのだと、本能で受け入れてしまい——

「ふふっ……♡……ありがとうございます、お客様♡」

さなは、差し出された五枚のコインを受け取って、再度——深々とお辞儀をして、それから——
「それでは……たっぷりとご覧ください……♡

……この豊満な乳房が……弄ばれる光景を……♡」

「——ひゃあっ!?!♡♡」

さなは——ゆうの背後に回り、ブラウスのボタンを外していく。

ただでさえ窮屈で、特注サイズを必要とするゆうのバスト。

立体裁断で乳袋が出来るブラウスをオーダーメイドしたのは、客寄せになればと思つてのこと。さなは、彼女のボタンを一つずつ外していき——ゆうも逆らうことはない。頬を真っ赤に染めながら、目を瞑っている姿は——まるで、予防接種の注射を嫌がって、眼を逸らす子供のような姿。

そして——さなは、ゆうのブラウスのボタンをすべて外して——



「どうぞ、ご覧くださいお客様……一メートル丁度……一〇〇センチ……」ぐらびああいどる”や”えーぶい女優”よりも大きな……ゆうのおっぱいを……♡」

ゆうのバストを、露わにする。

——その迫力は、どれだけ繰り返し見ても、決して慣れることがない代物。

通常の人生では恋人に「Cカップ」があれば、十分満足ができるもの。「Eカップ」や「Fカップ」もあれば、生涯、巨乳の肩書きから逃れて生きることが出来ない。「Gカップ」から先は、最早、「真面目に勉強をして良い大学に入って、一部上場の大企業に就職して出世を目指す」よりも「自分の肢体のエロさを使って男をたらし込む」の方が、簡単に勝ち組の人生を歩むことが出来るだろう。

それが——

「こちらのゆう……”けーかつぶ”となっております……♡」

雪城優香は——バスト一〇〇cmのKカップだ。

A B C……と、一から数えていかねばいけないのがKというアルファベット。Gカップの巨乳女より、更にカップ数が四つも上。中年リーマンの彼にとって、風俗のプロフィールでは頻繁に眼にする数字かもしれないが——それは飽くまで、HPの詐称された成績だ。異世界ファンタジーのトルルやオークのような身体つきの女——バストとウエストが同じサイズの女の、肉にまみれたKカップは少しも楽しくないが——

奇しくも、胸を小さくするために肉を落とす努力をしていたゆうは、ウエストがきゅっと引き締まっている。

しかも、指で軽くつまめる程度にうっすらと脂肪が乗っている——
俗に言う「最高の抱き心地」な身体。

AV女優でも豊胸と整形手術を何度も繰り返してようやく——といった代物を、天然で持っている美女が、ゆうだ。そうなる——後は、めぐのときと同じ。

先ほどの「こういった機会に慣れていなくて、男性を性的に誘惑する方法を知らない」という点が、魅力になるのだ。

足跡一つない新雪にダイビングしたい——真っ白な雪の平原に初めて足跡を刻む男は自分でありたい——という独占欲を刺激して——

「ほらほらっ……♡とても、柔らかいのですよ……この乳の肉は……♡ああ、ブラジャーがあるので……それはじゃまですが……申し訳ございません……当店は……これより先は見せることが出来ませぬので……どうか……この、”すらいむ”のように柔らかく、しっかりと指が埋まり……しかし、ずっしり、実の詰まった果実であることを意識しながら……たっぷり……ご堪能くださいませ……♡」
さなは、ゆうの乳房を背後から採みしだく。

本来はコイン五枚でブラジャー越しの乳房を自分で採むだけのだが——それは常連客候補へのサービスということなのだろう。さなの小さな手は「お手手」と呼ぶのが相応しい代物。その「お手手」が五指を使っても、肉が余って溢れるゆうの爆乳。ブラジャー越しなのでほとんど形は変わらないが——それでも、男性客の興奮を煽るのは必然。

カメラを見ると——他の客もどうやら、ゆうに夢中になっている。

あなたのためならば、敵に塩を送ることも躊躇わないさなの献身

——敵？

あなたの下半身も熱を持ち、僅かに硬く隆起している。それ以上のことを何度も経験した身であっても、雄としてこの世に生まれついた本能からは、簡単には逃れられないらしい。

「申し訳ございません……お客様……♡当店のコンセプトが……こうして……私たちの日常を見ていただくので……お客様が、こうやって……このでかでかうし乳女の乳房を揉むことは出来ませんが……♡せて……今夜、お客様の夢の中でお会いできるように……たつぷりと、その網膜にお焼き付けください……♡今夜……あなた様の夢の中では……さなの貧相な乳房も……このデカ乳女の、やわやわずっしりおもおおっぱいも……お客様は、すべて、食べ放題の”ばいきんぐ”でございますから……♡」

さながたつぷりと煽る言葉の、ほんの十分の一の語彙もゆうは持っていない。

だから、顔を真っ赤にして、されるがままに乳を揉まれていた女。

正直——彼女を襲おうとする男たちに、同情はしてしまふ。

自分ではないが——「押せばやれる女」が彼らは目の前にいるのだ。股間の性的興奮を、自慰行為ではなく、異性を使って解消したいと思えば、ゆうを口説かない理由はないはずで——

ゆうはと来たら、そうして、ギリギリまでは押せばやれるくせに——最後の一線だけは、万里の長城やベルリンの壁を遥かに凌駕しているのだ。

「押せばやれそう」と思うのは、中年リーマンも同じ。

今、店内にいる客の多くはゆうの常連になるのだろうとあなたは考える。下手くそな性的奉仕でも喜んで指名して、チップをはずめば——何かのきっかけでお近づきになれるかもしれない。一度でも店でデートをすれば、後はホテルに連れ込めば最後まで行ける——と勘違いをさせて、男から金を巻き上げる姿勢。ゆうを悪女に仕立て上げるのが、さななりの敵意なのかとも思ったが、流石にそれは発想が飛躍しすぎだ。

「なあ、アタシも混ざっていいか？」

と、提案をしたのは——

ゆうとさなの共演でお茶を挽いていためぐだ。

黒髪のさなと茶髪のゆうに、金髪のめぐ。三者三様の美少女は、奇しくも「ルナティック学園」の上位三人の組み合わせ。事情を知っているのはさなだけだが——

「今日、初めて来ただけで、まだ常連になるかもわからない中年リーマンにするサービスとしては過剰ではないか」

と、あなたは自分の太腿を抓って、感情を打ち消そうとして——

それから——

自分の太腿を抓らなければ消せない感情を抱いていることに気が付いた。

見学店の店長として、彼女たちを雇っている立場で——何が嫉妬だと、自分自身を殺してやりたくなる。それでも——あなたの鬱屈とした感情とは裏腹に、何も知らない彼女たちは楽しそうな笑顔。めぐは自身がフェラチオに使っていたデイルドを、ゆうのブラジャー越しに挿入してやる。

「おらっ……想像しろよ変態……♥お前が揉んだこともないようなこのでつかい乳に……お前のそれが挟み込まれてる姿……♥おらおらっ……こうやって上下にシゴいてやるよ……っ♥」

「あっ♥♥んんっ♥♥ちょ、ちよっとお……♥♥」

もう……意地悪しないでよ……めぐちゃん……♥♥」

「ふふっ……本当に立派なうし乳ですね……これで、様々な殿方をたぶらかして……まこと、許せませんね……それと……めぐさんも、同罪ですよ……♥♥」

「えっ？」

「男友達のような気安い雰囲気醸し出しておきながら……実際は八八センチの”じーかつぷ”……殿方が喜ぶ身体つきなのは……めぐさんも同様にございます……っ♥」

「そんなこと言ったら……さなの尻だつて……男が好きなわかってんのか……っ♥」

さなはめぐの乳房に狙いを定めて、めぐはさなの臀部を触る。

三匹の雌猫のキャットファイトは、しかし、本気の喧嘩ではない。飽くまで対立関係を重視しながら、いちやいちゃしているだけ——勿論、場をコントロールしているのはさなだが——

そうして、Kカップのおっとりデカ乳お姉さんがブラジャー越しにディルドをパイズリして——

Gカップの生意気ヤンキーがその乳房を正面から揉まれて——

八〇センチの安産型デカ尻お淑やか美少女が、尻をぐにぐに揉まれている姿に——

興奮が抑え込められなく——

「あっ、あっ……射精るっ……!!」

びゅるるるくくくっ♡どっぴゅっ♡びゅるるっ♡びゅくんっ♡びゅるるっ♡♡♡♡
中年リーマンは――

今日一番濃厚な射精を、マジックミラーへとぶっかけた。

同時多発的に、他の席でも彼らは射精をしていく。ピピピピと、終了を告げる電子音が鳴っても、三人の少女は絡み合いを続けて――他のキャストも、女性の身でありながら見惚れて動けないらしい。唯一冷静なのは、それをカメラ越しで眺めて、温度差があるあなただけ。もうすぐ閉店時刻。この掃除を自分がしなくちゃいけないのかと思うと――それだけが憂鬱だった。

いやあ、僕はこういうお店に初めて来たんだけど……中々いいもんだねえ……

いやね、最初はえっちなサービスなしって聞くじゃん？でもさあ、流石に手コキくらいはあると思つたら……それすらなくて……えっちなお店で自分でおナニーするなんて久々だけど……

やっぱり……女の子のレベルが高いのはいいねえ

セックスしなくてもいいなら、つてんで、普通の風俗じゃ絶対にいないような女の子ばかり……いやあ、気に入ったよ……十代の性欲を取り戻したような気分だ……

……それで、裏オプってのはいつ解禁されるんだい？

またまたあ、誤魔化さなくていいよ。君、店員？……あつ、店長なんだ……へえ……

やっぱり、あれかね？初回の客には教えられない感じかい？

いやはや、誤魔化さなくてもいいって、手コキやフェラの裏オプは、常連になって、絶対にバラさないって確証を持つてからだろう？ははっ、気長に通うよっW可愛い子も多かったし、店も気に入っ

たからね……

それで、会計は？

……五一〇〇〇円か。あれだけ延長して、コイン買ってもそんなもんかい。いやあ、安いねえ、気に入ったよ

えっ？

そりゃ、スープと比べて本番はないけど……スープでは三回も射精できないからねえ……今度は、四番席じゃなくて、反対側の席も座ってみたいな。まっ、それはおいおい……それじゃ、カードで……はいっ……はいっ……

んっ？スタンプカードもあるのかい？これが満杯になったら裏オプ教えてもらえるのかな？はっはっは、いいよ言わなくて、そういうのを自分で開拓していくのも大人のたしなみさ……

それじゃ、ありがとね……また来るよ

4・ルナティーク学園が誇る人気嬢三人（発情済み）からの特別ご奉仕

中年リーマンは想像以上に、良質な客だったあなたと思う。

金払いが良くて、店員には敬語を使えて——何より、どすけべなおじさんだ。あなたは四番席を掃除しながら考える。二枚重ねのマスクを貫通する、濃厚な雄の精臭。マジックミラーに直接ぶつかることだけは勘弁してほしいが——今度、それとなく非貫通式オナカップをおすすめしてみようかも考えたところで——

「オーナー……お掃除の方は……終わりましたか……？」

「うっわ……あいつ、鏡に直接ぶつかったのかよ……マスター、これも掃除すんのか？」

「あっ……♡この臭い……んっ♡すんすんっ……ふ、うっ……♡店長……私、この臭い……ふ、ううん……っ♡♡」

三人の少女——

さなとめぐとゆう——

早苗と恵と優香が、入ってくる。

ネットカフェの個室のように窮屈な二畳ほどの個室。他の客もバイトもキャストも全員帰って、施錠もしたので——今、「ルナティーク学園」にはこの三人だけ。

広い教室がマジックミラー越しには広がっているのに、二畳の個室に全員が勢ぞろいだ。

制服姿の少女たちはまだ着替えていない。あなたの仕事が終わるのを待っていたのが、痺れを切らしたのだろう。「掃除と閉店作業を終わらせてから帰るから、先に帰っていてほしい」と言ったのに、三人とも――

「あの……早苗……はしたないとは思ったのですが……その……我慢することが出来ず……申し訳ございませ……♡」

「しょうがねえだろ、今日はいっぱい指名も来たし……んっ♡あんたが一番わかってんだろ……？あんな変態野郎に晒し者にされた……アタシ達がどうなってるのか……♡」

「そ、その……お疲れなら……私、我慢しますけど……て、店長が……したいなら……じゃ、なくて……店長が出来るなら……私……したいです……♡♡」

三人の美女が――じりじりと、あなたに迫り寄ってくる。

個室の掃除が終わっていないからと、言い張ることは出来ない状況。彼女たちは熱に火照って、頬を赤く染めている。大勢の男性客にエロい眼で見られて、オナペットになり続けたのだ。彼らの欲情を、その細い身体ですべて受け止めた代償は大きく――

完全に発情した三匹の雌猫は、もう、我慢も出来ないようだ。

薄暗い個室内で、制服姿の三人の美少女。

据え膳食わねば――とは簡単に言うが、彼女達は丁寧に扱う必要がある。なので――
あなたは、三人に尋ねる。

――今日の売上げナンバーワンは誰だ、と。

「……………!!!」

勿論、帳簿を付けて、売上げ管理しているあなたが知らないはずもないのだが——
これは恒例の儀式のようなもの。彼女達の中で、優先順位を自らつけさせるのだ。

「ううっ………♡申し訳ありません………」

今日は、最後のパイズリでいただいた五枚だけです………♡♡

「………早苗は、一八枚です………恵さんの活躍を見ていたので………どうにか、稼がねばいけないと思ったのですが………普段、必要としていないときは余計に集まるのに………絶対にほしいと思うと、中々………得られないものですね………」

優香と早苗は、それぞれ、コインを差し出す。

一枚千円のコイン。おひねりだけでも、彼女達は通常のアルバイトの時給よりも高い収入を得ているわけだ。二人の少女からコインを受け取って、あなたはポケットに入れる。

そして——

「へへっ、見ろよ………二一枚だぞ………♡いやあ………久々に早苗に勝ったなあ………最近、四連敗中だったからさあ」

満面の笑みで撫でられ待ちをしている——恵は上機嫌。

「次回は負けません………早苗にも………」なんばーわん”の意地がありますので………♡

「ううっ………私も、次は最初から入りたいなあ………ねえ………店長？コインの枚数で決めるの………やめにしません？」

「でも、指名数なら早苗が圧倒的だけいいのか？新規の客も常連も、二回以上の指名があるなら絶対に早苗選ぶだろ」

「……オーナー……早苗のコインが少ないのは……おひねりをいただけなくても、決して差別せずに……ご満足をさせる努力のためです……♡どうか……その分を差し引いて考えていただければ……これは……早苗は、実質一位と言っても過言ではないのでは……？」

言いながら、早苗はあなたに抱きついてくる。

今日の客の中で——誰一人として、指一本、触れることが許されなかった「さな」の身体。

早苗は細く、肉付きも悪い。臀部だけは大きく育っているが——脆弱な肉体が、まるで、子供を孕んで遺伝子を残すことには使命感でも抱いているかのように歪んだ発育で——だから、あなたが早苗を抱き寄せるときは腰ではなく、尻を鷲掴みするようになっていく。

今回も、その例に漏れず——

「あっ……♡」

早苗はあなたに尻を掴まれて、嬌声を響かせる。

大部屋の教室内では制服を着崩して——事務所内ではきっちりと着こなす。そして——あなたに抱かれるのが目当てのときは、最大までスカートを詰めて——最早、尻肉をほとんど晒しているのだ。

今日は特に、Tバックであるので——あなたの手に広がるのは、早苗の生尻の感触。すべすべで極上の触り心地で、指がむにゅゅ♡と埋まるくせに、しっかりと弾力があって、指をはじき返してくる極上の尻肉。ここに肉棒を挿入して、その弾力を堪能することが出来れば、涎が出るほどに気持ちい

いとあなたは知っている。あなたの五指が尻肉を揉む度に、腰をくねらせて反応をする早苗。そのま
ま、夢中になって堪能していると――

「ちよ、ちよっと！今日はアタシの番だって言っただろ！」

あなたの腕を乱暴に掴んで、恵が自身の胸元に抱き寄せる。

彼女の豊満な乳房はゆうほほどではないが――圧倒的に大きな八八センチ。二の腕が触れると、ブラ
ジャー越しでも乳肉の豊満を感じさせる。金髪ショートで、不良じみた雰囲気彼女の彼女の中に感じる、
柔らかな雌の感触――雄の勃起と欲情を煽るには十分すぎるもので、あなたは――

「ひゃっ……っ♡んっ♡……ちよ、ちよっと……まだ、アタシ……いって言ってないのに……勝手に
揉むなよお……っ♡」

早苗の臀部を触っているのとは、反対側の手で恵の乳房をむんずっ♡と鷺掴みにする。

女性の乳の揉み方は様々な種類があるが――正面から、鷺掴みにするときの興奮は特別。街中でや
れば、悲鳴を上げられて、一発で逮捕までいく行為が認められているという事実。恵は涙目であなた
を睨み、口では拒絶をするが――逃げることはないし、なんなら、両手を後ろに組んで、揉みやすい
ように胸を張っている。

なので――あなたは彼女の耳元で囁く。

――胸を揉んでもいいか、と。

「えっ……ど……どうぞ？」

自分から胸を揉ませる許可を、気の強い恵に出させる興奮は格別。

彼女のブラジャーの型くずれを気にしない、力強い乳揉み。極上の美少女二人——見学店の人気ナンバーワンと人気ナンバーツーを抱き寄せて、その乳と尻を両手で堪能する行為——雄として、これ以上の榮譽はないだろうなとあなたは考える。

普通の風俗店ならば大枚を叩けば幾らでも出来る行為だが——「ルナティーク学園」では絶対に出来ない行為。裏オプは存在しないし、何度通ったとしても、彼女達にはお触り厳禁。

それを——

あなたは、ただの一円も払わずに堪能できるという——最高の優越感に、興奮は止まらない。いや、一千万円は払っているのだが。

早苗はともかく——恵と優香は、実は債権者である自分に断りきれないだけなのかと思い、不安になるが——恵は眼を細めて、あなたの胸板にすりすり頬を擦り付けてくるのだ。どこか犬っぽい性質のある少女。彼女の口元に指を持って行くと、ぺろぺろと、それを舐めしゃぶる姿。

「……せーえきの味……ちよつと、する……♡」

手袋をして処理をしても、貫通する臭いが、味として感じるのだろうか——

それが自分のものではなく、他の雄の精液であることは不快感。

勿論——繰り返すが手袋はしている。それに触りたくないのは自分も同じ。指先には、ほんの一滴も彼らの精液は付着していないはずなのに——

「ふうむ……本当ですね……誰かの精液の味……オーナーとは違う雄の精液……れえ♡……♡」

早苗も、あなたの指を舐めしゃぶりながら——他の雄の精液の味を感じ取っているのだ。

二人の美少女に指をペロペロと舐められる。くすぐったさがぞくぞくと背筋に広がり、あなたの勃起は一段と激しくなる。「これ以上大きくなることはない」と思ってから、更に三段階くらいの屹立をしている気分。

「んっ♡れえ〜……れるれる……っ♡じゆるるっ♡……んんっ♡ちゅっ♡ちゅぷっ……♡殿方の太い指……いつも、早苗の秘部を穿ってくれる素敵な指……あむう……♡」

「あんた、アタシらに指舐められんの好きだよな……♡今度、手の模様でも置いてみたらどうだ？あいつら、結局シゴくのは自分の手なんだから……こうやって……れろお〜♡指が涎まみれになっているの……興奮すんじゃねえの……ちゅぷっ♡」

あなたは二人の美少女の指舐めを堪能しながら――

「あ、あの……店長……私は、ど、どうすれば……」

オロオロとしている優香を見つめる。

積極的な二人の年下少女に、完全に出遅れた優香。あなたの両側は既に奪われているので、残っているのは正面だけ。これが早苗や恵ならば、あなたと正面から口づけをしたり――乳首を責めたり――あるいは倒錯的だが、口で蒸れた靴下を脱がせたりするのだが――

優香には、まだ、そういった行為は早いかとも思ってしまう。

だが――

「優香さん……難しく考えることはございませんよ……？」

「そーそー♡アタシら、店にいるときはNGプレイもちゃんと考えないといけないけど……んっ♡じ

ゆるるゝ♡……こいつと一緒にのときは……優香さんのやりたいことやっちゃえばいいんだよ♡」

「や、やりたいこと……♡♡」

「優香さん……早苗達は……雌猫にございます……♡ただの雌ならば、気を使って、遠慮をして、彼のことを考えて……彼を満足させる必要があります……♡それが、雌の役割……♡雄の子を孕んで、家を残すことが使命ですが……雌猫は違うんです……♡」

「んーっ、難しいことはわかんねえけどさ……こいつ、結構などすけべで……最初は嫌がついてたくせに、アタシらに尻の穴舐められて気持ちよくなっちゃうくらい、何でも受け入れてくれる……『変態野郎』だしさ……」

……優香さんがしたいこと、したら、こいつは喜んでくれると思うぜ？」

二人の年下少女が、優香の背中を押す姿。

微笑ましくて素敵なものだが——現状は、どこまでも淫靡な空気に満ちあふれている。あの中年リーマンの吐き散らした精液の臭いと——発情した三匹の雌のフェロモンが入り混ざって、頭はくらくらとする。職業柄、媚薬や媚香といったものを試すこともあるが——それらとは比較にもならないほどの興奮度合い。

優香は——

ぺたんっ♡♡と、その場に尻をつけて座り込む。

あなたを見上げている彼女の顔。自分よりも年上の魅力的な女性が、自分を店長と仰いで——上から見下ろすと、彼女の乳房の大きさが極端に際立つ。

一メートルというバストサイズ——通常の風俗店でも滅多に出会うことが出来ない代物。あなたがそれを恋人や妻にしたとき、全ての雄が妬まじさを抱える。どうして自分の隣の女は、それだけの乳がないのかと、深い溜息を吐くだろう。そうして、無駄に他の女の嫉妬を買って、勝手に敵を増やす優香。彼女が望んだことではないのだろうか——それでも、彼女の乳房が大きすぎる以上、その妬み嫉みは避けられないものであり——

そして——

「あの……今日……そ、その……」

私のパイズリで……興奮、しました？」

あなただけが——その乳房を、好き勝手に貪ることが出来るという事実。

優香はあなたのズボンのベルトに手を伸ばす。「女性のブラジャーのホック」に相応するのが「男性のズボンのベルト」かもしれない。優香の手つきは、童貞男子がブラジャーのホックを外すのと同様な下手くそ。元々不器用な上に、他の男のそれを脱がす経験も極端に不足している、手際の悪さだが——これだけの爆乳ドスケベ女に、その経験がないというのは、一八〇度回転して魅力に変化するから卑怯だ。

「あっ♡♥えっと……ええと……っ♡♥」

「優香さん……落ち着いてください……♡お店は既に……閉店しております……♡ここには、十分の短い制限もございません……♡心を落ち着かせて……大丈夫……彼を喜ばせようとする、優香さんのお心……きつと、喜んでいただけると思います……♡」

ンツの上からおちんちん……すりすりするの、好き、なんですよね……？んっ♡あう……♡私の
お顔に……店長の……おちんちんの臭い、いっぱいこびりついちゃって……♡これ……きつと……
シャワーでも洗い流せないくらい、濃厚でふ……っ♡♡

優香は、あなたの股間に顔を埋めながら恍惚に浸る。

ボクサーパンツでは勃起した肉棒の形が浮き出てしまう。布地越しにすりすりすると、顔を擦り付けられるのは、直接触られるのとは違った心地よさがある。優香は、パンツ越しに肉棒を咥える。グレーのパンツに涎のシミが出来て、それが、たまらない興奮になる。優香が甘噛みを出来るのも、間にパンツの布地を挟んでいるから。あれだけ大人しくて、お淑やかで、男に逆らうということが根本的に苦手な少女が——今は自分の陰茎を、自慰行為の際に愛用しているディルド代わりに使っている興奮。「ああっ……優香さん、素敵です……♡やはり……雌は、雄に屈している時の表情が一番……美しいですね……♡その点……恵さんは、その意識が薄くて困りますが……♡」

「……うっ、別に……こんな変態野郎に媚び売る気なんてねえし……♡た、確かに……優香のこの顔、女のアタシから見てもエロいと思うけど……で、でも……アタシこんな顔……」

に、似合わねえだろ？」

上目遣いで——あなたを見つめてくる恵。

極上の雌の肢体を持っていて、ルナティック学園の人気ナンバーワンでありながら——自分の容姿に自信を持たないのは、最早、犯罪と言っても差し支えはない。この極上の雌が勘違いを続ければ、それは、大勢の雄にとって不利益と損失をもたらす。なので——

「あっ……はいっ♡かしこまりました……♡」

「うっ……舐めればいいのかよ……♡」

あなたは、二人の口元に——再度、指を差し出す。

先ほどと違うのは二点。

一つは、あなたの指が今度は、愛液でどっぷりと濡れていること。手袋越しに味わう、精液の幻想とは異なり——しっかりと、雌の膣が雄をほしがっている分泌液に浸っているそれは、あなたの元々の指の味と相まって、多少のしょっぱさを持っていることだろう。

そして——もう一つは

「じゅるるるっ♡れろおく……♡これが……恵さんの味なのですね……♡んっ……少々、味が濃くて……喉にひっかかるような……んっ♡濃厚な雌の味……なるほど……オーナーが、恵さんに蹴られながらもクンニをやめず……潮を噴くまで舐め続ける理由……少し、わかったような気がします……♡」
「なっ、人の愛液のレビュースんじゃねえよ……むぐっ♡じゅるるるっ……♡んむっ……♡さ、早苗のは……な、なんて言うんだろ……ちよつと、味が薄いつていうか……でも、無味無臭でもなくて……ずつと、飲んでられそうっていうか——あー、もうっ！こんな上手に言えるわけ……ねえ……だろ……じゅるるるるっ♡」

二人の美少女は、互いの愛液で濡れた指を舐めさせられている。

わざとらしく、ハムスターのように頬袋に唾液をたっぷりと溜めて——涎を絡ませながら指を舐める少女達。空気との摩擦で響かせる下品な水音は、流れの悪い排水溝を連想させるが——あなたにと

って、それは、どこまでも興奮を導くもの。

普段の高校のクラスメイト——大学の同じゼミ生——彼らが死ぬまで、一度も見ることが出来ず、脳内の妄想で我慢することしか出来ないそれを——あなただけが独占している状況。

二人の指フェラにも違いがあり、早苗は指を全て口にくわえ込んで、舌を動かす。華奢な少女は顔も小さく、なので、あなたの人差し指を少し動かせば、簡単に喉にひっかかり、えずいてしまうだろう。それなのに——彼女は喉奥まで啞え込んだ上で、舌先をちろちろと動かし、あなたの指にフェラチオをするのだ。

一方で恵は、顔を前後に動かして、指をくぼくぼとしゃぶっている。最小限の動きでああなたの興奮を最高に導く早苗とは違い、不器用さが感じ取れるフェラチオ。だが——ルナテイク学園の客と同様に、その不器用さに興奮を感じてしまうのは雄の本能。奉仕が下手くそなくせに、奉仕が大好きな少女というのは、ただでさえ可愛らしいのに——それが恵のように、金髪ショート、一見するとどこまでもヤンキーな彼女から与えられるのだから、その優越感足るや比肩するものが見つからないほどだ。

「す〜っ………♡……ふはあ〜………♡
……すんすんっ………す〜っ………ん、つふう………♡♡♡」

そんな中で——優香だけはマイペースに、あなたの股間の臭いを嗅いでいる。

「したいことを、本能の赴くままにすればいい」という提案だが——彼女はそうして、あなたに甘えたいのだと察する。元より、どれだけどすけべな身体つきをしていても、あなたに会うまではセック

スをしたいと思うことすらなく、処女の身を貫いていた女なのだ。「性的欲求の解消」をオナニー以外に知らない彼女は、社会人でありながら少女と何も変わりはない。だからそうして、失った青春を取り戻すいちやラブを求めている——映画を見ながら、肩にもたれかかりゆっくりと頭を撫でられたり——お風呂に入りながら、向かい合って何度もキスをしたり——

その延長線上で、あなたの股間の臭いを嗅ぐことに陶醉しているようだ。

だが、あなたがそれだけでは物足りないのも事実。

「あつ、う……………♡あ、足……………♡当たって……………ま、す……………っ♡♡♡♡」

「……………当てられているんですよ、優香さん……………♡オーナーは……………早く、次のことをしろと……………ご所望していらっしゃるのです……………♡♡」

「んっ……………♡まあ、気持ちにはわかるけどさ……………こいつの、ちんぽ……………ほんと、くっさいし……………♡何時間でも、嗅いでられそうだし……………でも……………辛そうだから……………早く、助けてやってくれ……………♡」

「ひゃ、ひゃいっ!」

優香は、それが怒られたと思ったのだろうか。

元より内気な少女だが——ちん嗅ぎで発情して、とろとろになった脳味噌は、飼いうサギよりも低い「の」なのだろう。捨てられることを恐れたように——年下の、休学中の大学生に泣きそうな顔を見せる女。嗜虐心がそそられるし、優香を恋人にすれば、多分、自分ですらDVを振るってしまうのだろうな、などと考えながら——

あなたは、優香に命令をする。

「は……はいっ♡♡」

それは——彼女にとつては救いとなる言葉。

要領が悪い彼女には「時間をかければ、彼女でも出来る仕事」を与えてやるのが効率だ。優香にとつて、早苗や恵のように媚びることは出来なくても——時間を捧げることは出来る。

だから、彼女は嬉々として、あなたの股間に顔を寄せて——

あむ——っ♡♡

と——あなたの下着の端を、口で咥える。

あなたが下した命令は「どんなに時間がかかってもいいから、口でパンツを脱がせろ」というもの。それは心が折れていない娼婦に命令をすれば、屈辱を与える行為だが——すっかりと、身体と心の芯が蕩けて、媚び切っている優香にとつては陶醉に浸れるもの。彼女が必死に、身体ごと動かしながら下着を脱がせようとする度に——大きな乳房がぶるんっ♡♡どたぶんっ♡♡と揺れ動く。言葉は悪いが——男の欲情を煽る以外の価値を持たないような下品なデカ乳の揺れを——今、自分だけが見ることが出来るのだ。

そんなあなたの視線に、気が付いたのか——

「ほへ……みふあいれふか……？」

優香は、がら空きの両手で自身の乳房を下から持ち上げて——あなたに、そのサイズ感を強調する。生まれ持ったの能力が決して高くないために、自分の内面には自信を持ってない優香。男達が狙っているのは自分の身体だけと思いきんでるので、顔を褒められても素直に受け取れない優香。

だが――

「男達が身体を狙ってくる」だけは紛れもない事実なので――

「わぁ……優香さん……とても素敵です……♡」

「ほんと……この乳、女のアタシから見ても……やべえと思うわ……♡」

「……………♡♡♡」

優香は――自身のエロさには、強い自信を持っている。

「求められれば誰にでも股を開く尻軽女」になってもおかしくない、紙一重の状況だが――その一枚を隔てた先で「あなただけに心を許して、裸体を晒す、あなた専用の娼婦」になっているのだから問題はない。優香はブラのホックを外す。彼女が毎日――毎日――繰り返しているその手つき。他の雄には絶対に見せることがないそれを――自分は、二人の極上の美少女を侍らせながら――特等席で鑑賞することが出来るのだ――

そうして――

――どたぶんっ♡♡

「わぁ……♡」

「すっご……♡」

優香の生乳が、露わになる。

彼女の豊満な乳房は豊かに満たされて――本当に「豊満」という二文字が相応しいサイズ感だ。

牧場で草を食みながら、母乳を搾り取られて生涯を終えるホルスタインを彷彿とさせるが――雄の

手に触れたときの柔らかさは、そんなものの比ではない。

優香の乳房はたっぷり、柔らかな脂肪に包まれている。健康的な恵の引き締まった腹筋を撫でたときと——その、正反対にあるような彼女の乳房。指がどこまでも埋まるくせに、持ち上げるとずっしりと重たく、手首が疲れてくるのだ。ブラジャーで窮屈に締め付けないと、足下が見えなくなるデカ乳——胸の谷間が「Y」ではなく「I」になる長乳——そのくせ、セックスや運動にあまり触れてこなかったために、ほとんど未使用で新品同然のクーパー靱帯によって支えられて、張りのある——雪城優香の、最上級一〇〇センチKカップ——

「見てください……優香さんの横乳に残った……ブラジャーの跡を……♡……これだけ大きく……下品で……殿方の欲情を煽って……金玉をいらいら……むらむら……♡ばかおんなが、雄様のちんぼのむずむずを煽って……劣情を解放させる以外の役割を持たない……えろめすが……♡雄様をバカにするのもいい加減にしろよ……お前の身体で罪を償え……と……憤ってしまうようなこのデカ乳……♡ほんとは……下品なだけで……慎ましきの欠片もない……大和撫子としてあるまじき大きさ……♡」

早苗は、あなたの耳元でぽそぽそと囁く。

僅かな私怨も含まれているのだろうか——彼女の薄っぺらな乳房を乱暴に愛撫してやると、嬉しそうに眼を細めながらあなたにもたれ掛かってくる。なので、それでいいのだろうかと考えながら——あなたは、優香の乳揺れを見学する。

「うっわ……♡優香もかわいそうにな……♡こんな変態野郎のことを好きになつたばかりに……んっ？だつて、そうだろマスター……♡あんたみたいな変態じゃなければ……優香は普通の女として……

…普通の男の嫁になれたのに……♥あんたが……あの『クソ野郎』から助けたばかりに……優香は、ヤクザの情婦として、人生を消費されて終わるだけの被害者じゃなくて……あんたのことが大好きで、好きで、好きで、たまらなくて……酒飲みながら、酔っぱらって、あんたと結婚したすぎてたまらな
いって泣いちゃうような……そんな、雄にとつてどこまでも都合のいいエロ女になっちまったんだぞ
……♥責任とれよな……変態やろ……♥」

「ん、んんん~~~~っ♥♥♥」

恵の暴露は聞かなかったことにするが——優香は、口をパンツで塞がれているので抗弁も出来ない。
涙目の上目遣いで恵を睨むが——

「ああん？結婚したくてたまらない……なんて……暴露にもならねえくらい、小さなことだろう……
……もつとヤバイ実弾なら、アタシ幾らでも持つてるんだぞ」

と——恵はさながら、悪党のような笑みを浮かべる。

実際は酒癖の悪い優香に付き合わされた、せめてもの意趣返しなのだろうが——

「へえ……優香さんも……そうなのですか……♥」

「……アタシは興味ないけどな……こいつの嫁……な、んて……♥だって……こ、こいつ……別に、
かっこよくなんかないし……」

「……………ほお」

二人の少女のバチバチは無視をして、あなたは優香を見下す。

彼女はどうか——

額から珠のような大粒の汗を垂らしたところで——あなたの下着をずり下げ終える。

そして——露わになった肉棒は——

「……………わぁ♡♡♡」

先っぽが包皮に包まれた——仮性包茎だ。

見学店の店長として、問題が起きないように店内中に仕掛けられたカメラで監視をしていた。

見たくもない男達の陰茎を無修正で見せられるのは辛かったが——それでも、大小様々な陰茎を見せられると——あなたは、自分の逸物への自信感を抱くことが出来なくなる。

それは勿論、平均値や中央値と比べれば、多少は上にあるのだろうが——人間の脳の構造上、どうしても、比べるときは最上位を基準としてしまうのだ。

日本人とは到底思えないサイズのビッグマグナムや——真珠やシリコンを入れて改造したペニスに——一度、先端が真つ二つに裂けている客と出くわしたこともある。結局のところ、雌がつがいを選ぶときは「一番」と「それ以外」に分かれてしまう。自分がどれだけ、彼女達を満たそうとしても——自分よりも遥かに優れた肉棒の彼らが、寝取りにくれば抵抗は出来ないのではないかと——

「……………えいっ♡」

浸っていたところに——

「……………オーナー……………」ねがていぶ”は、禁止にございます……………♡」

早苗のチョップが——あなたの額に打ち付けられる。

「えいっ♡……………ほんと、マスターのこれだって自信持っていと思うぞ?……………いや、アタシも……………他

の奴のをじろじろ見たことないからわかんねえけどさ……」

「……え、えいっ♡……そうですね、いつもマジックミラー越しで……私たちを使っているお客様
の顔は見えないですけど……でも……店長のは、きつと……立派なものだと思えますよ？」

早苗に便乗するように、恵と優香もあなたの額に——軽いチョップをぶつけてくる。

三人の美少女に誘導されるがままに——あなたは、座椅子に腰掛けさせられる。

先ほども、あの中年リーマンが座っていた席。尻の温もりは感じられないが——それでも——ここで、彼女達の痴態を眺めながら、大勢の客が陰茎をシゴいていたことは知っているのだ。

極上の雌三匹——あなただけが直接触れる権利がある彼女達が——尻をふりふりと振って、胸をゆさゆさと揺らして——雌の尊厳をマジックミラー越しに売り渡す。客である彼らが欲情を鎮めるために、陰茎をシゴく姿。売り物にして、店頭に並べているのは店主の自分なのに——その屈辱が、どこまでも辛くて、その痛みを感じる度に——自分を殺してやりたくて仕方がなかったのに——

「オーナー……身体のを抜いてください……♡」

「そーそー♡……二人とも話したんだ……今日は、あんたに労う日だって……♡」

「いつも、お客様がそうするように……女の子の身体を、自分の欲望を満たすために使う、それを……今日は、店長にしてほしいんです……♡♡」

ちゅっ——♡♡

と、あなたの唇にキスを交わしたのは、優香が最初。

引っ込み思案である彼女だが「セックス」ではなく「あなたを喜ばせるための一方的な奉仕」であ

ると言われると、素直に身体が動くのだろう。優香とキスをしていると、彼女の無防備になった乳房が眼前で揺れる。年上の社会人であるお姉さんが——裏では見学店で痴態を晒して——しかも今では、甘い唾液をあなたと交換しあいながら、デカ乳をゆさゆさとぶら下げているのだ。

あなたの手が伸びるのは、肉棒を持った雄として生まれた以上、本能的に避けられない必然で「んっ……♡」と優香は、鼻にかかった嬌声を響かせる。

その間に、早苗と恵は制服を脱いでいる。

早苗はともかく——恵と優香は女子高生の年齢ではない。だから、彼女達が「ルナティーク学園」の生徒であることを証明するためには——制服のスカートが必要なだろう。上のブラウスを脱いで、ブラジャーも外して——上裸になった姿は、とことん、非現実的なインモラルを秘めていて——あなたの興奮も高まっていく。

「あっ……♡オーナーの足……とても、香ばしい匂いにございます……♡」

「んっ……くっさ……♡……でも、アタシらのために……頑張ってるからなんだよな……♡」

早苗と恵は、座椅子に座って足を伸ばした——あなたのつま先へと、顔を寄せる。

尻を高く突き上げた四つん這いになって——靴下にぴたりと鼻をつけて、すーっ♡ふーっ♡と肺一杯に広がる深呼吸をしている美少女達。二人の少女は、「嫌がりながらも、あなたを喜ばせるため」ではなく「本気で脳髓にがんがんと響いて、まんこが濡れる香ばしい媚香」として、あなたの足を捉えているのだろう。その上で——先ほどの優香に張り合うように、唇で靴下を啜えて——脱がせていく二人。優香とキスをしながら、その乳房をたぶたぶと弄んで——二人の美少女に靴下まで脱がせら

「……店長……こちらも……吸ってください……♡♡」

どたぷんっ♡

と——あなたの顔面には——

バカみたいにでっけえ乳が乗せられる。

ミルクの甘い香りと——雌のフェロモンがむんむんに詰まった汗の臭いが入り交じった彼女のデカ乳。少し大きめの乳首は、彼女に子を孕ませたときに、栄養満点の母乳をたっぷりと出させるためのもの。

『夏場は、その……蒸れて、すごく大変で……トイレで上着を脱いで……下乳を汗拭きシートで綺麗にしないと……すぐに、汗疹になっちゃうんです……♡♡』

とまで言わしめる、優香の熱がこもった下乳が——顔面に乗せられている状況。

片方三キロはある、優香のデカ乳——ポーリング玉ならば子供用の七ポンド——果物ならば一人食べられるギリギリの小玉スイカ——過小評価することは幾らでも出来るが——

あなたの顔面を覆っても、なお、溢れる乳肉の体積。

長くそのポーズを続けていれば、首が疲労骨折するか、頸椎が損傷することは自明の理。必要のない意地を張っての負傷はばかばかしいので——

ちゅぱちゅぱっ♡

「んっ……♡ふふっ……ママのおっぱい……おいちいでちゅか？」

あなたは——優香の乳首に吸いつく。



普段のあなたならば格好付けて、平静を装うが——雪城優香の一〇〇センチを目の前にして、それを貫けるほどに、雄として不能ではない。唇を蛸のようにすばめて、鼻の下を無様に伸ばした姿。優香の幻滅を誘うには十分すぎる顔だが——その無様が彼女にとって、愛おしさに繋がるのだろうか。彼女はあなたの頭を、まるで、腹を痛めて産んだ我が子を慈しむように撫でながら——

「シコシコ♡♡ちこち♡♡ママのお手で……おちっこいっぱい、だちまちようね♡♡」
と——反対の手で、あなたの陰茎をシゴいてくるのだ。

「授乳手コキ」と呼ばれるそれだが、通常の行為ならば飽くまで「乳首を吸わせた上で、手コキをするだけ」のもの。それが彼女は、あなたを赤ちゃん言葉であやして、おむつがなければ一人で用事も足せない未熟者だと思つて接しているわけで——

「赤ちゃん手コキ」と呼ぶに相応しいそれに、あなたの脳味噌はぐずぐずに蕩かされていく。

それが激しくあればまだ、あなたのことを一匹の雄と見込んで、気持ちよくするためのものと割り切れるのだが——

「大丈夫でちゅよ……♡♡ママ……ボクちゃんのおちんちんに……ぜつたい、いたいたいほちまちえんから……♡♡」

優香の手つきは——あなたの陰茎を、優しく、くすぐるようなもの。

上下にシゴく速度は緩慢としていて、それも、亀頭から根本ではなく——中間のところゆさゆさとしていくだけ。一〇〇時間続けても、射精が出来ないような微弱な快楽が続くそれに——雄の本能が勝てるわけではない。

本気で——その瞬間、あなたは、優香ママのおっぱいに甘えてしまう。

何でもない一般人だった自分に背負わされた、分不相応な重荷——優香の乳首を吸っている間のあなたは赤ちゃんなので、何も考えずに、ただ、気持ちよさに浸ることが出来る。母胎で羊水に包まれていたとき以来の、居心地の良さであり——あなたは、そのまま眠りにつきそうなのだが——

「むう……♡やはり……殿方は大きな乳房の方がよくて……それは、あなた様でも例外ではないのですか……」

「まあ、仕方ねえよな……優香の乳は、ちよつと別格だよ……アタシだって……言っとくけど……大学ではかなりデカイ方なんだから……」

二人の少女が——あなたの耳元に顔を寄せる。

それから——

「れろお〜……♡……じゅるっ……ちゅ〜っ……♡……じゅ、ぞお……♡むちゅ〜……っ♡」
「じゅるるるっ♡じゅぞ〜っ♡むちゅっ♡じゅるるるっ……れろれろっ♡ちゅっ♡ちゅっ♡」

——！？

「あっ……早苗ちゃんと恵ちゃんにお耳舐められて……」

店長……すっごくくだらない顔していますね……♡♡」

あなたの耳に——舌を這わせてくる早苗と恵。

アダルトな音声作品には頻繁にある代物——「ASMR」と呼ばれるそれを、動画サイトで聞いたことはあったし——イヤホン越しに、直に囁かれたり舐められるような臨場感には、背筋がぞくぞく

と痺れるのだが――

「ふふっ……♡♡お耳舐められるの……気持ちいいでちゅか？」

耳に直接――彼女達の舌が這うのは、別格。

熱くて、質量があつて、ぬるぬるな舌が耳を這うのは直接――脳味噌を犯されている気分だ。彼女達の呼吸ですらも、官能的で蠱惑的に響き――それだけでも射精をしまいそうなほど。早苗と恵――二人の少女はあなたの腕を、自身の両太腿で挟んで、逃がすつもりは全くないらしい。あなたは必然――

手首から先を曲げるだけで触れられる、彼女達の秘部に指を這わせる。

いつの間にか、下着が脱げていて――指先に触れるのは――

現役JK人気ナンバーワンの安土早苗と――

現役JD人気ナンバーツの日向恵の――

法に触れる以外では、決して触る機会のない――生まんこ。

彼女達のクラスメイトや同学部の学生が懸想しているそれを――

あなたは、二人一緒に食べ放題であるという事実。

二人の秘部の弱点は、何度も、身体を重ねたのでわかっている。指を根本まで挿入されて、子宮に近いところをトントんとノックされるのが好きな早苗と――腹部側の、膣の浅いところをカリカリと小刻みに引っかかれるのが好きな恵。あなたの耳を陵辱して責めているはずが――
二人とも、腰をびくびくと弾ませながら、あなたの手マンに耐えているのだ。

そうして——

「……………♡♡♡」

優香もまた、「赤ちゃん手コキ」では足りないと思ったのだろう。

彼女はあなたの身体からずり下がっていき——やがて、股間の前で止まる。

大勢の客がこの座椅子に腰掛けながら——マジックミラー越しの彼女達を眺めて、懸想していた妄想——

「二人の美少女を両側に侍らせながら、一〇〇センチデカ長乳Kカップ女にバイズリしてもらおう」というそれが——

「んっ……失礼しますね♡♡」

ぬぶぶぶぶ~~~~♡♡♡♡♡

あなただけでは——現実の物とすることが出来るのだ。

優香の質量がハンパない、バカみたいにデカイ乳房——肉棒は乳肉をかき分けて、押しつけて——文字通り「挿入」と呼んで差し支えがない。乳房がデカすぎると、それは秘部に肉棒をぶち込むのと同じようなものになるのか——と、思いながらあなたは、仰向けになったまま快楽を貪る。

二人の少女は、優香が股間に移動したことで——あなたの顔が自由になったことに気が付く。

普段ならば積極的に、舌をくるくると根本で絡めるキスをしてくる早苗と恵だが——

どうやら、先ほどまであなたの足を舐めていたことが、キスを躊躇う原因であるらしい。

勿論、足の指を一本ずつしゃぶり、谷間の糸くずをごっくんと飲み干し、爪と指の間に舌を這わせ

てお掃除を出来る、献身的な彼女達が、今更、キスを拒むはずもない。

問題は――

そうして、あなたの足を舐めしゃぶった唇でキスをしてもいいのか――という躊躇いだ。

ちんぽをしゃぶった後の口ですら、キスをしていいのか――というのは議論になるもの。自分の肉棒にお口でたつぷりとマッサージをしてくれて、唾液で綺麗にしてくれた少女に――まさか、キスを嫌がるはずもないが――それはそうと、現実的に、抵抗感が存在するのも事実。

ましてや、今回の二人は足を舐めた後。

早苗の腫が僅かに濁っているのは「そうなる前にキスを堪能しておけばよかった」という後悔か。恵があなたの身体にぎゅぐゅと抱きつくのは、「折角、唇が自由なんだから、今なら甘え放題のキスし放題なのに」という葛藤か。

だから、あなたは――

「あつ……♡はいっ……かしこまりました……♡」

「んっ……しょうがねえな……♡命令されちゃ……んっ♡拒めねえもん……♡」

――早苗と恵に、命令をする。

耳だけじゃなくて――口でキスをしたい、と。

「あむっ……♡ちゆるっ……♡れえ〜……っ♡……むちゅっ……んむっ……みゅっ……ん……っ♡」

「んむっ♡じゆるるるっ♡……ほらっ、もっと舌らせっ……♡アタシの涎……♡飲みたいんだろ♡」

「恵さん……ずるいです……私も……んっ♡……まだ、飲んではいけませんよ……♡恵さんと、私の、

涎の”ぶれんど”……

たっぷりと、お口で噛み噛みしてください……ふふっ……いい子、いい子……♡」

二人の少女は、あなたの頭部と顎を押さえながら——逃げ場をなくして、唾液をそそぎ込んでいく。オプシオンにはないが——彼女達の唾液を欲しい、とアンケートBOXに入れていく客は多い。当初は、気が触れた変態の世迷い言だと思っていたが——彼女達の唾液を流し込まれていくと、その気持ちはわかってしまう。あなたのそれは、顔を舐め回して、乾いた後には悪臭を放つような代物なのに——彼女達の唾液は甘露で、飲めば飲むほど、勃起が促進される媚薬のような代物なのだ。あなたは、二人の秘部をぐちゅぐちゅと乱暴にかき回しながら、そうして、ダブルペロチューを堪能する。

「あっ……♡♡私も、お口にすればよかったかなあ……♡♡」

優香は、名残惜しそうに未練を囁きながら——

ぱちゅんっ♡♡ぶちゅっ♡♡じゅぶっ♡♡ぶちゅ、るっ♡♡ぐちゅっ♡♡

あなたの肉棒を、激しく、乳でシゴいていく——○○センチのデカ乳女。

デカすぎる乳房を両側からぎゅっ♡♡と抱きしめて、乳圧を最高まで引き上げている優香。あなたの肉棒は、少しくらい激しい方が気持ちいいと——何度も身体を重ねた経験で理解しているのだろう。仮性包茎の包皮がめくられて、内側にこびりついた恥垢が——

「れえ〜♡♡♡♡」

彼女の唾液ローションと相まって、ぐちゅぐちゅ、音を鳴らして浮いていく。

四番テーブルの客が、オプシオンとして注文して——使い残したローションがある。手淫用のそれ

は量が少ないが——それでも、優香は最後の一滴までを谷間の間に流し込んで——ぐぶっ♡♡ぶびゅっ♡♡と下品な水音は更に激しくなる。潤滑性を増した谷間は、最早、膣内に挿入しているものとはとんど変わらない。「パイズリは意外と気持ちよくない」と最初に言ったのは、誰なのだろうか。それは少なくとも——優香のような極上の雌の、生乳を使ったパイズリを経験してないのだろうか。と、それだけはわかる。

あなたの股間に乳房が打ち付けられる度に、優香のそれがたぶんっ♡たぶんっ♡と波打つ光景。

優香は両手で乳房を押さえ込み、それを上下に動かしたり——下乳であなたの亀頭をぐりぐりと押しつぶしたり——両手でああなたの金玉を揉みしだきながら、ノーハンドパイズリで身体を上下させたりしているが——

あの——雪城優香から極上の奉仕を受けていることに、あなたは射精寸前。

普段は企業の事務として働いている地味女——デカ乳を強調するノースリーブを着用しながら「そんなつもりはなかった」と堂々とのたまう女。電車に乗れば痴漢されない日の方が少なく、エロ上司からは日常的にセクハラを受けている女。肩を揉まれたり、胸のことを言及されることは日常茶飯事で——薬指に結婚指輪をはめた上司から、堂々と、さし飲み誘われるような魔性の女だ。

彼らからすれば「これほどまでに誘っている女がいるのに、声をかけない方が、雌にとって失礼だ」と聞き直らせてしまうものなのだろうか——

それは、あながち間違いではない。

一〇〇センチの乳房に極上の容姿。タイトスカートでは尻がパツパツで、前屈みになって尻を突き

出そうものなら、男性社員が前屈みになってしまふ女が——そこに至るまでの人生で、自分の容姿と雌としての価値に自覚のないはずがなく——

「嫌なら断るだろう」と彼らは、無謀を承知で誘って——

このバカ女が立場を弁えずに「断らずに誘いを受ける」ので、問題が大きくなるのだ。

ノースリーブで電車の吊革を掴み、腋を晒け出しながら——さし飲みを断りきれずに、隣に座ってほろ酔いの顔を晒しながら——「休憩するだから！何もしないから！」と性欲丸出しの主張を晒せば、ホテルに連れ込めるくせに——

貞操観念だけは硬く、情緒が未発達である故に、寸前で本気の抵抗をして——

自分を襲う雄への、目潰しや金的に抵抗を持たない雌。

今まで——雪城優香という雌が、世界中の雄に希望を持たせて、弄んだという罪を——

世界中の雄を代表して、あなたが清算してやっているのだ。

優香のパイズリにあなたの肉棒は暴発寸前。先ほど——彼女達が他の雄に痴態を晒している姿を見せつけられて——金玉でぐつぐつ、ことごと、と煮込まれた精液。自慰行為の際に、適当に吐き出すような代物とは違い——雌を本気で孕ませるために、優秀な遺伝子が選別されたそれを——

優香の乳房に無駄撃ち射精をすることは、許されない。

足をつま先までぴーんっと伸ばして、あなたは必死に耐える。射精するなら優香の膣内——例えばピルを服用していたり、安全日であって、無駄死になるとしても——金玉の中で生み出された精液達の墓場は、あの極上の雌の子宮にしてあげたい、というあなたの気持ち——

「……我慢をしてはいけませんよ……♡いつも……オーナーが早苗達に放つ言葉です……♡早苗達が気持ちいいのを我慢すると……絶頂するのを耐えると……そうして……意地悪をしてくるのに……自分だけは我慢するなんて……♡オーナー……誠に、ずるいお人です……♡」

かりっ……♡こりっ……♡くにっ……おにっ♡……かりかり……♡♡

「そーだそーだ……♡普段、アタシらが『もーやだ』『イきたくないっ』って泣きながらおねだりしても……許してくれないくせに……自分だけはイクの我慢するとか、なしだろ……♡……ほらっ……雌みために無様に鳴いて……イけっ♡」

かりかりっ♡くりくりっ♡かきっ♡くにっ♡こりこり♡かりかり♡

両側からあなたを挟み、キスをしていた早苗と恵が――

「ふふっ……殿方も乳首で興奮するのは……」

「なんか……めっちゃウケるな……っ♡」

あなたの乳首を――両側から責めてくるのだ。

乳首を自分で開発したことはないのだが――二人の少女の丹念な責め。舌を根本でくると回して、唾液を交換しあつて、互いの間に一センチの距離でも出来るのが嫌がるように、密着して二人。どれほどに大きな器からでも、溢れるほどの、大量の愛情が存在するのは火を見るよりも明らかで――彼女達は、そんな愛情を惜しげなくあなたに捧げてくれるのに――

あなたのことを小馬鹿にした意地悪な指使いで、乳首を愛撫してくるのだ。

ぞくぞくと全身に浮かぶ鳥肌。彼女達が普段、大勢の雄に妄想で犯されているようなそれが――今

「うっわ……♥それにしても、おまえ……出しすぎだろ♥」

「仕方ありませんよね……♥私達が……他の殿方の前でお尻ふりふり……♥おちんちんこねこね……♥おっぱいゆきゆきと……沢山、煽ってしまったことで……オーナーの肉体は危機を感じたのでしよう……♥」

これは……寝取られだと……♥

……俺様の所有物である雌どもが……奪われてしまう……♥競争に負けた末に……極上の雌の空っぽの腹に、他の雄の子種を植え付けられるのは……それは、雄としての死のようなもので……だから……人が死に際に……最も発情して、最高の子種を生み出すように……

私達を奪われるのが……オーナーにとっては、死も同然の苦痛だったのですね……ふふっ♥」
早苗の言葉に肯定をするように、びゅくんっ♥と、あなたの肉棒は一度、大きく弾む。

「んっ……あたしに何しろってんだよ……変態野郎♥」

恵は、あなたに甘えるような甲高い声で尋ねてくる。

尻尾があれば、ぶんぶんと振りそうな態度——それを待ち望んでいるのにも関わらず、飽くまで「あなたの命令だから仕方がなく従っている」という関係性を崩すつもりはない少女。
なので、それに従って、あなたは命令を下す。

「……お掃除フェラしろって……おまえ、ほんと……変態だな……♥」

口では不満を言いながらも——その口で、あなたの肉棒をぱくっ♥と啜る恵。

じゅるるるるっ♥ぐぶっ♥と激しく肉棒に吸いつき——両手で金玉を包みながら、優しく揉みしだ

く少女。あなたの肉幹に丁寧に舌を這わせて、精液と愛液がブレンドされたそれを、喉を鳴らして飲み込む恵——

「ああっ……優香さんも……顔中、精液まみれになってしまいましたね……

拭いて、さしあげますね……♡」

早苗は、あなたの精液で眼も開けられない惨事になっている優香が気になったのだろう。

彼女が手に取るのは、部屋に備え付けのティッシュではなく——先ほどまで、優香が着用していたKカップ用のブラジャー。K60とタグに書かれたそれは、日本人用のサイズがないので、わざわざ海外から通販で購入したという代物。それを早苗は——ティッシュの代わりに使って、優香の顔を拭いていくので——あなたが興奮をするのも必然のこと。

早苗は、精液を指で掬って——それを優香の口元へと運ぶ。

優香は眼を瞑っているの、意図を掴みかねていた様子だが——どすけべなことには順応しやすいのが、どすけべな雌という生き物。あなたの精液まみれの指を、ペロペロと舐めて——綺麗にしている。

そこで、早苗は気が付いたのだろう。

あなたを興奮させる手段がある、と。

「……しーっ、ですよ……オーナー……♡」

あなたの精液まみれの人差し指を口元に当てて、あなたに無言を要求した早苗は——

すっ——

と——反対側の綺麗な指で、マジックミラーにぶっかけられた精液を掬い取る。

それはあなたのものではなく——

三人の痴態を眺めて、興奮して、自慰行為に耽っていた中年リーマンのもの。

早苗はあろうことか——その中年リーマンの精液を、優香の口元に運ぶ。僅かな気配で、何か、違和感に気が付いたのか。すんすんっ♡くんくんっ♡と優香は臭いを嗅ぐが——

味ですら判別は難しいのに——まさか、臭いで判別が付くはずもない。

なので、優香は——

ぺろっ——♡

と——あなたのものではない精液を、舌で舐めとる。

そのとき——あなたが感じた憤りが、どちらに対するものなのか。

優香が頭の悪い雌犬であることは、今にはじまったことではない。そんな彼女の知能の低さを利用して——自分ではない雄の精液を舐めさせた早苗か——それとも、あれだけ自分の陰茎と陰囊と精液を褒め称えて、うっとりとした恍惚に浸りながら堪能するくせに、自分と中年リーマンの精液の違いすらわからない優香か——あなた自身が、どちらに怒りの矛先を向けなければならない状況だが——股間の肉棒は、激しく屹立しているので、だから、順番ということで早苗を押し倒して——その後は恵を犯して——ぐじょぐじょに濡れた秘部を持て余した、優香の膣にもちゃんと挿入をしてやって——朝が訪れるまで、三人の身体で、都合、一三回の射精をした。